キリストは教会を愛された

—新約教会の原則の概要—

ウイリアム・マクドナルド

エマオ通信講座

"Christ Loved
The Church"

by

William MacDonald

目次

第一章　キリストのからだなる教会……一
1　教会の定義
第二章　キリストのからだなる教会—つづき—……七
2　教会の起源
3　教会に関する七大真理
4　教会の完成と神の御旨
第三章　地域的教会……一八
1　地域的教会の定義
第四章　一つのからだであるという真理……二三
第五章　かしらなるキリスト……三〇
第六章　受けいれの基本方針……三三
第七章　教会の中にいます聖霊……四一
第八章　教会の規律……五〇

第九章　教会の発展……五九
第一〇章　祭司としての信徒のつとめ……七三
第一一章　教会の儀式……八〇
1　バプテスマ
第一二章　教会の儀式―つづき……八八
2　聖餐―主の晩餐
第一三章　祈禱会……九三
第一四章　監督たち……一〇三
第一五章　執事たち……一一六
第一六章　教会財政……一二四
第一七章　婦人の奉仕……一三三
第一八章　主のみもとへ進もう!……一四三

第一章　キリストのからだなる教会

「キリストは教会を愛してそのためにご自身をささげられた」。私たちもまた、教会を愛すべきである。そして、いまここに述べるような意味において、自分自身を教会のためにささげるべきである。私たちは、地上における教会が発展し、栄え、凱旋するために、愛をこめた喜びあふれる奉仕をもって―犠牲的に、そしてまた献身的に―自己をささげなければならないのである。

本書の目的は、新約聖書の中から、「キリストのからだなる教会」の性格と行動とを決定づけている、とりわけ重要な原則を取上げて、考究していくことである。そのため、まず全世界的教会の偉大な不変の諸真理をくわしく見ていき、そうして後に、個々の地域集会が、このような真理を生活と実践のうちにあかしする責任のどれほど大きいかを、示していくことにしようと思う。

本書の初めにあたって強調しておきたいことは、教会の身分の正しさは、断じて、その状態の正しさと切離して考えてはならないということ、すなわち、一つ一つの地域的教会を形成しているキリスト者自身が常に真理のための生ける証拠でなければならないということである。本書では、終始一貫してこの点を

強調して行きたいと思う。

いまここで、普遍的教会に目をむけて、まずこれを定義し、述べて行くこととしよう。

1 教会の定義

A 新約聖書においては**教会**（church）という言葉はギリシャ語の**エクレシヤ**（ekklesia）という言葉の訳語であって、「召し出だされた仲間」、「集会」、「議会」というほどの意味をもつ。ステパノはイスラエルのことを述べるのに「荒野における集会」（使徒七・三八）という言葉を用いている。使徒行伝においては、この言葉はエペソにおける異教徒の群衆を記述するにも用いられている（使徒一九・三二、三九、四一）。しかし、新約聖書における、この言葉のもっとも一般的な用法は、主イエス・キリストに在る信者の群れを記述することである。このようにパウロは、「神が御子の血であがない取られた神の教会」（使徒二〇・二八）のことを語っているのである。コリントのキリスト者への第一の手紙において、この偉大なる使徒は、全世界をユダヤ人、異邦人、および神の教会に分けている（コリント前一〇・三二＝文語聖書＝）。また彼は、その回心前に自分が迫害したキリスト信徒の群れをも含めての、神の教会の一体性を認めている（第一コリント一五・九）。

B 教会は単なる団体組織ではなく、一個の有機体であるとは、しばしば言われてきているところである。これはすなわち、教会が生命のない制度ではなく、生きた一個の生命体であることを意味す

る。教会は、キリストのいのちにあずかるすべての者、また聖霊によって、生きた統一体として結び合わされているすべての者の、親しい交わりである。「制度化した性格を少しも持たぬ、人と人との純粋な親しい結合体」という表現に、それは的確に言い表わされている。

C新約聖書においては、多くの描写的な呼び名が教会に対して用いられており、その一つ一つがもつ意味の深さをじっくりと考えてみることは、教会というものを真に理解するようになる最上の道の一つである。次に、教会に関するきわめて明解なたとえを挙げよう。

1 一つの群れ（ヨハネ一〇・一六）。ユダヤ民族は同じ囲いの中に守られている一つの群れであった。教会は一つの群れなのである。ヨハネによる福音書一〇の一六において主はこう言っておられる、「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。」群れという考えは、よき羊飼の愛に満ちたやさしい保護の下に、み声に聞き従いつつ生きるキリスト者の一団を、ありありと想起させる。

2 神の同労者（第一コリント三・九）。教会は、神がご自身の栄光のために実を結ばせようと目論んでおられる神の畑なのである。実を結ぶという思想が、かくてここに私たちの前に提示される。

3 神の建物（第一コリント三・九）。この表現は、建て合わせて行くという御計画をおし進めておら

れる神を描写している。神はいまも教会に生ける石を増し加えておられるのである。神がかくまでも熱意をこめておられる建設の御計画に、私たちのいのちが献げられるということは、何と重大なことであろうか！

4 神の宮（第一コリント三・一六）。「宮」ということばは、直ちに礼拝という考えを連想させる。そしてそのことは、神が今日受けられる唯一の礼拝が、教会を構成しているキリスト者たちの献げる礼拝であるということを、私たちに想起させるのである。

5 キリストのからだ（エペソ一・二二、二三）。からだは、人間が自己を表示する器である。このように、キリストのからだなる教会は、今日の世界に対して、主がご自身を表示されるために選ばれた単一の個体である。この大いなる真理を一たび把握すれば、信徒は、教会の重要性を過少評価することは決してないであろうし、キリストのみからだのためにもっとも役立つよう、自己を余すところなく献げつくすであろう。

6 新しい人（エペソ二・一五）。ここにある新しい創造という考えは、きわめて特徴あるものである。人間の間に存在するありとあらゆる相違のうちの最大なもの—すなわちユダヤ人と異邦人との差異—が、教会において撤廃されたのであり、神がこの二つの異質の人々を含わせて一個の新しい人を造られたのである。

7神のすまい（エペソ二・二二）。この表現は、神が、旧約聖書におけるような幕屋、あるいは宮から、さらに進んで、今はかかる意味での教会のうちに住まわれるという真理を伝えている。

8キリストの花嫁（エペソ五・二五―二七、第二コリント一一・二）。教会に関するこの見方は、愛情というものの概念に高い光輝をそえる。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会をご自分の前に立たせるためです。」　もし、キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたのなら、教会もまた明らかにキリストに対して、花嫁にふさわしい愛情の火を燃え立たせるべきではないか。

9神の家（第一テモテ三・一五）。家（あるいは家族）という言葉は秩序と規律を語っている。この秩序という思想はテモテへの第一の手紙三の一五に示唆されている。　「神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。」　規律ということはペテロの第一の手紙四の一七に記されている。　「さばきが神の家から始まる時がきた。」

10真理の柱、真理の基礎（第一テモテ三・一五）。古代においては、柱は建物の支柱としての目的の外に、公的な通知事項を掲示する役目にもしばしば使われた。それは公告の一つの便法であっ

た。また、基礎という言葉は、とりで、あるいは支えという意味をもっている。このように神の教会は、神が真理を宣言し、支え、守るために定められた一つの統一体なのである。それゆえ、もしキリスト者が、神のみこころと御目的にそうものであろうとするなら、教会の発展と繁栄のために、あらん限りの努力をささげねばならないのである。

今日、多くの人々が、自分の使命は福音を宣べ伝えることにあるとの誇りをいだくあまり、教会とは何らのかかわりをもたない孤立的な立場をとっている。この人々は、使徒パウロの働きが二重のものであったことに留意すべきである。

1「キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え」ること。更にまた、

2すべての人に対し「奥義を実行に移す務めが何であるかを明らかにする」こと。すなわち、教会についての偉大な心理の中に根をおろさせることである。（エペソ三・八、九）。

第二章　キリストのからだなる教会—つづき

2 教会の起源

A 教会の初めの時期については、偉大な信心深い人々の間で広く意見が分れたまま、今日に及んでいる。多くの人々は、集会は旧約聖書におけるイスラエルの延長か、その自然な発展であると信じている。他の人々は断固として、教会は旧約聖書のうちには存在せず、神の新しいみこころによって始まったと主張する。次にしるす考察は、後者の見解に立脚するものである。

1 エペソ人への手紙三の五においてパウロは教会のことを、「今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていなかった」ところの「奥義」として、語っている。更にまた九節では、教会は「万物を創造された神の中に世々隠されていた奥義」であると述べている。（第一コリント二・七、ローマ一六・二五、二六参照）。このように、教会は、旧約の時代の初めから終りまでずっと神によって秘められてきた奥義だったのであり、新約の使徒と預言者が現われるまでは、決して顕現す

ることがなかったのである。

2 マタイによる福音書一六の一八において、主イエスは「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」と言っておられる。言いかえれば、主がそう語られたその時には、教会はまだ未来の存在であったわけである。

3 再びエペソ人への手紙四の八―一一にもどろう。ここでパウロは、教会に賜物を分け与えられたのは、復活して昇天されたキリストであるということを強調している。このことは、もし教会が主の昇天よりも前に存在したとするなら、必然的に、その徒を高めるための賜物を欠いていたことになるという事実を、きわめて明解に物語っているのである。

B 私たちは、教会が新しい神のみこころによって始まったことを示し得るばかりでなく、いっそう明確に、ペンテコステの日から存在し始めたと断言できるものと信じている。

1 キリストのからだなる教会は、聖霊のバプテスマによって形成されたと記されている（第一コリント一二・一三）。では、私たちは、聖霊のバプテスマがいつ起ったかを決定できないであろうか。

2 使徒の働き一の五を見ると、主は御昇天の直前に、使徒たちに向かってこう約束しておられる、

「もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

3 ペンテコステの日には、「すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、

他国のことばで話しだした。」

4使徒の働き五の一一までくると、この時にはすでに教会が明確に存在している。なぜなら、「教会全体…は、非常なおそれが生じた」と記してあるからである。

このことは疑いもなく、ペンテコステの出来事が教会の誕生日であることを、的確に指し示しているように思われる。

5教会に関する七大真理

神の教会に関する多くの偉大な真理が使徒の働きと新約聖書の各書簡のいたるところに織り込まれている。ここでは、とりわけ重要な真理のうちの七つを、かいつまんで解説し、あとで、それを更に深くほり下げて行こうと思う。

1からだは一つである（エペソ四・四）。

聖書によれば、教会はただ一つしか存在しない。あらゆる事情が、このことを否定しているように見えるにもかかわらず、神に関する限り、この事実は依然として厳存するのであり、今日、地上には、信ずる者から成る唯一のからだだけが存在するのである。たとい、この教会の姿全体が、人間の目に映ずることは決してないとしても、なおそれは、聖霊によって一つの共通のからだに形づ

くられているのである。

Bキリストはからだなる教会のかしらであられる（エペソ五・二三、コロサイ一・一八）。

パウロは人間のからだを例にとって私たちにこう教えている。天におられるキリストは頭（かしら）として、地上におけるご自身のからだを統御しておられるのである、と。かしらという言葉は、権威と、指導権と、知性の所在とを物語っている。頭とからだとは、同一の生命を共に担い、共通の関心と期待とを分ち合うのである。からだがなくては、頭が完全なものではあり得ないように、非常に現実的な意味において、キリストは教会がなければ完全ではないのである。このようにエペソ人への手紙一の二三に記されている、「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」このことこそ、信ずる者のうちに、もっとも深い畏敬の念と礼拝の心を起こさせる事柄なのである。

Cすべての信徒が主のからだの器官である。（Ⅰコリント一二・二七）

一人一人が救いを受けたその瞬間に、主のからだの一つの器官として、教会に加えられるのである。この主のからだの器官という身分は、人種、皮膚の色、国籍、気質、教養、社会的地位、言語、教派というような束縛を超越したものである。

キリストのからだの器官についての有名な聖句（第一コリント一二・一二―二六）において、パウ

ロは次のような点に注意するよう、私たちを促している—

1 一つのからだに多くの器官があること（一二—一四節）。

2 器官の一つ一つが、遂行すべき職務をもっていること（一五—一七節）。

3 しかし、器官のすべてが同じ機能をもっているわけではないこと（一九節）。

4 主のからだなる教会の繁栄は、その器官の全員が共に働き合うことによること（二一—二四）。

5 からだの器官のすべてがお互いを必要としている以上、ねたみや不満の芽生える原因もなく（二五—二七節）、また、誇りや独立独歩へ向かう素因もないこと（二一節）。

6 すべてが一つのからだの器官であるゆえに、お互いの間に助け合いと、思いやりと、よろこびが取りかわされるべきであること（二三—二六節）。

D 聖霊は教会における、キリストの代理者、牧者であられる（ヨハネ一四・一六、二六）。

主イエスは、天に帰って行かれた後、地上におけるご自身の代理者として聖霊をつかわされた。教会における聖霊の活動は、次のようなことから、ある程度まで知られることと思う—

1 聖霊はキリスト者を礼拝において導かれる（エペソ二・一八）。

2 聖霊はキリスト者の祈を神にとりなして下さる（ローマ八・二六、二七）。

3 聖霊はキリスト者の宣教を力づけられる（第一テサロニケ一・五）。

4 聖霊はキリスト者の活動を、積極的（使徒一三・二）にも、否定的（使徒一六・六、七）にも、みちびかれる。

5 聖霊は教会のために監督たちを立てられた（使徒二〇・二八）。

6 聖霊は教会が成長し、有力になるために賜物をさずけられた（エペソ四・一一）。

7 聖霊は信ずる者たちをあらゆる真理に導かれる（ヨハネ一六・一三）。

E神の教会は聖なるものである（第一コリント三・一七）。

神は御名のために働く人々を、諸国民の中から召し集めておられる。神はこの人々を罪ある世から分けられたのであり、この人々に対しては、実際に聖なる生活をもって応答することを求めておられるのである。こうすることによってのみ、教会は、この腐敗した有様のただ中において忠実に聖なる神をあらわすことができる。

F賜物は教会の徳を高めるために与えられている（エペソ四・一一、一二）。

教会が霊的にも数的にも成長することこそ、主のみこころにほかならない。この御目的のために、復活された主が教会に対して賜物を与えておられるのである。これらの賜物とは、教会を築き上げていく特別の能力を、さずかっている人々のことである。すなわち、エペソ人への手紙四の一一に記されているように、この賜物は—

1　使　徒、
2　預言者、
3　伝道者、
4　牧　師、
5　教　師。[1]

使徒と預言者は、本来、教会の土台にあずかるものであったと、私たちは信じている（エペソ二・二〇）。この使徒および新約の預言者に対する必要性は、礎石が据えられた時に解消したのであって、その言葉がもつ本来の意味においては、もはや使徒と預言者は存在しないのである。[2]

註 1. 第一コリント一二・八―一〇には、霊的な賜物の別のリストが記されている。すなわち、知恵のことば、知識のことば、信仰、いやし（癒し）の賜物、奇蹟を行なう力、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力である。この二つのリストの間に矛盾があるというには当たらない。エペソ四章においては、賜物とは明らかに、その生涯を宣教か、教えか、牧者の仕事かに打ち込んでいる人たちのことである。第一コリント一二章においては、必ずしも賜物とは、特定の個人をさすのではなく、聖霊がキリストのからだの器官なるメンバーのだれにでも、自ら選ばれた時に与えられる資性とか能力とかを、さすのである。たとえば、キリスト者の男の人はだれでも、「知恵のことば」か「知識のことば」を人に教える御霊のみちびきを受けるであろうが、それでもなお

教師そのものではないのである。また、魂をキリストへ導くことのできる人もあるであろうが、それでもなお、伝道者であるというわけではないのである。

さらに、第一コリント一二・二八でパウロは、使徒、預言者、教師、奇蹟を行なう者、いやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者のことを述べている。ここで必然的に起こってくる疑問がある。それは、不思議なわざを行うという性格の賜物が、今日でもまだ私たちにはあるのだろうか、という疑問である。ヘブル二・四には、神がしるしと不思議とを、初期の福音宣教を確かなものとし、あかしするために用いられたことが述べられている。これは、完全な神のみことばが、文字に書かれた書物という形で利用できるようになる以前の時代のことなのである。多くの人々は、完全な聖書が出来上った時に、奇跡の必要性は消滅したと信じている。しかし、聖書はこの問題に決定的な結着をつけてはいない。私たちは今日、こういう不思議なわざを行う賜物が、一般的な意味では、すでに私たちにともなってはいないと信じているものの、それでもなお、主権をもっておられる御霊が、今なおこれらの賜物を用いる自由を、もっておられないとは、言いきれないのである。とりわけ、聖書がまだ広く利用できないような宣教地区では、そうである。何はともあれ、こういう不思議なわざの賜物をもっていると主張するものは、それを用いるに当って、みことばの指示（たとえば、第一コリント一四章に定められている異言の用い方）のとおりに、深い注意を払わなければならないのである。

註2. 第二義的な意味では、疑いもなく、今もなお使徒は存在する。もし私たちが、この言葉をただ単に主からつかわされた人々という意味で使うとするならば—。この、副次的な軽い意味では、預言者もまた、今なお存在する。すな

わち、神のために、罪と悪習に反対して叫ぶ人々という意味ではー。しかし私たちは、最初のころの使徒たちにかだねられていたのと同じ権威をもつ人々、あるいは、新約聖書中の預言者と同じように、直接の、霊感をうけた啓示によって語ることのできる人々が、今もなお存在するという考えは、断固として拒否するものである。

しかし、今もなお、伝道者、牧師、教師は存在する。伝道者は、罪びとをキリストのみもとへと伴いゆくよきおとずれをたずさえて、世のただ中へ出てゆき、彼らをそれぞれの地における教会の交わりへと導くのである。牧師は、信徒の群れに対して、羊を養い、力づけ、悪から守る羊飼の労をとる。また、教師は、神のみことばを分りやすく説明し、聖書の教理を偏見にとらわれない態度で解明する。

これらの賜物を受けた人々が奉仕のわざにつくすとき、教会は成長し、聖徒たちはもっとも聖なる信仰のうちに建て合わされて行くのである。賜物は教会の発展のために神が備えられたものである。

G信徒はすべて神の祭司である（第一ペテロ二・五、九）。

教会に関して、私たちがここで挙げようとしている真理の最後のものは、すべての信者がもつ祭司としての職務である。旧約聖書においては、ある一つのグループの人々だけが祭司の職に適うものとされていたーすなわち、レビ族とアロンの一族である（出エジプト二八・一）。今日において

は、仲間の人々からの区別を保ち、特別な衣服と特権とをもつ特殊な人間の階級というものは存在しない。神の子らはすべて、そのような名をもって呼ばれるにふさわしい特権と責任とをもった神の祭司なのである。

4 教会の完成と神の御旨

既に述べてきたように、教会は今建設の途上にある。一人の魂が救われるごとに、生ける石が一つこの建物に加えられるのである。この大いなる建物は、鎚音一つ立たない静けさのうちに、その大きさを増し加えて行く。救わるべき魂を、聖霊は日毎に教会へと加えておられるのである（使徒二・四七）。

間もなくある日、このみわざは終りを告げる。最後の石が加えられると、主イエスは空中にくだってこられるのである。神の磁石で引き寄せられるかのように、教会は救主をお迎えすべく昇って行き、そして、主も教会もともどもに、父の家なる多くの家々に向かって帰って行くのである。「こうして、いつも主と共にいるであろう」（第一テサロニケ四・一七）。

永遠にキリストと共にあるばかりでなく、キリストが地上の御生涯のうちにかちとられた栄光にもあずかるということは、教会が受くべき恵まれた富である（ヨハネ一七・二二）。

永遠にわたって、教会は神の栄光のための永遠の証人であるように、計画されている。

「それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。」（エペソ二・七）。

また一方では、教会は地上における神の優れた作品であり、神の多様な御知恵についての天上のもろもろの支配と権力への具体的教訓である。それゆえ、すべての信者が、教会に命をかけて打ち込むべきであって、そのキリスト者としての奉仕は、教会の発展と薫陶とが、本来の目的の一つでなければならないのである。

第三章　地域的教会

1 地域的教会の定義

今までのページでは、普遍的教会、すなわち、見えない教会とも、秘められたキリストのからだとも呼ばれている教会について論じてきた。

更にまた、新約聖書は、与えられた地において信ずる者たちが形造る地域的教会についても語っている。このように、エルサレム、コリント、ローマ等各地の教会、あるいは集会についても記されているのである。これらは、神の教会の、地域的な現われであった。そのおのおのが自立の一つの群れであって、教会相互の間に交わりはあっても、互に独立しており、そのすべてがキリストに従属していたのである。

時代が流れるとともに、新約の教会の本質をなすものについて、無視できない意見の不一致が起こってきている。このことがらの手がかりを得る普通の方法は、いくつかの決定的な資格とか特徴とかを数えあげていくことである。もし、あるキリスト者のグループがこれこれの条件に合致したなら、それは

真の地域的教会と思ってよい、と言うやり方である。

一五九三年には、ヘンリー・バロウが、教会に関するもっとも代表的定義と思われることがらを述べている。

まことに深く根ざし、正しく建てられたキリストの教会は、忠信な人々の友であって、不信者から離れており、キリストの御名のゆえに集まり、キリストにまことの礼拝をささげて喜びつつ従うのである。かれらは兄弟であり、聖徒の親しい交わりであって、神が聖なるみことばのうちに命じかつ啓示しておられるすべてのことを実行するキリスト者の自由を、その一人々々がもち、またそのために生きているのである。

他の多くの定義は、はるかにそれよりも狭義のものであって、特定の教派かグループの教会だけを、現実には適格と認めているに過ぎない。

このことは、非常に現実的な疑問を提起する。新約聖書は、はたして、地域教会のための必要条件、あるいは、成立の要素を特定の数だけ列挙しているのであろうか？　一個の集会の特色とか、しるしとかが非常にはっきりと述べられていて、そのため信者という信者が、これらは真の新約の教会であるが、ああいうのは本物でないと、いたるところでその交わりを分離させてしまうことができるものなのであろうか。

私たちは、そうではないと言おうと思う。もし、真の教会になるということが、単にある一定の様式

を守るとか、明細に規定された集会の日課や行事を遂行するとかいうことの問題であるとしたら、その時はそれが霊的な働きをまつことなく、全く機械的にでき上るはずである。無気力と自己満足がそこから生じてくるであろう。教会の身分はこの上もなく正しいと言いながらも、信者の状態はなおそれに程遠いと言う外はないのである。

以上のようなやり方をとる代りに、新約聖書は次のような取り上げ方をしていると私たちは信じている。すべての信者は、神のめぐみにより、すでに教会を構成する一員であることが示されている。そこで全信徒が、教会の大いなる真理を現わすのに役立つように、共に集まることが強く説かれているのである。キリスト者の集会のあるものは、キリストの体であることをほんのわずかしか表わしていない。また、他の集会はもっと忠実に似合わしい姿をあらわしている。どの集会も完全にはなっていないのである。

このように、聖書のみことばは、律法主義的なやり方はとらないのであり、「あなたがたが一定の条件に適うなら、あなたがたは教会となるであろう」とは言わないのである。それとは反対に、聖書のことばは恵みのみことばである。すなわち、「キリスト者としてのあなたがたが教会にほかならないのであり、いま、この事実を世に向かって正確に表示するためにこそ集わねばならぬ」と。恵みのもとにあって行為の原動力となるのは、救主に対する愛である。そしてこの愛は、私たちをとりまく人々の目に、

キリストのみからだの忠実な映像をありありと焼きつけたいとの思いを、私たちにいだかせずにはおかないのである。

一口に言えば、地域的教会は、普遍的教会の縮図である。「教会がキリストのみからだである」という大いなる真理と相容れないことは、何一つあってはならないし、また、何一つ行なってはならないのである。

教会の本質と一体性とは、はっきりと示されなければならない。教会とは、内にいまして働きたもう聖霊によって形造られたキリストのからだであること、すべての信徒が栄光を受けた主に結ばれ、かつ、互に結び合わされている、主のみからだの器官の一つ一つであること、そして、来りたもう主がその前に輝く希望であり、キリストの御名こそ、教会がその御名によって呼ばれている唯一の名であること。このことが、はっきりと見る人々に分らなければならない。さらに、教会は、キリストのみからだの一体性を人々の前に明示するものでなければならない。1

そこで、もし地域的教会が完全な教会の複製であるとすれば、この地域的教会が生ける証拠となって立証すべきキリストのみからだについての、大いなる真理とは何々であろうか、私たちは、すでに七つの基本的真理に言及してきた。すなわち—

A存在するのはただ一つのからだであること。

Bキリストはからだなる教会のかしらであられること。
C全信者がそのからだの器官であること。
D聖霊は教会におけるキリストの代理者であられること。
Eキリストの教会は聖なる存在であること。
F賜物は教会の徳を高めるために与えられていること。
G信徒のすべてが神の祭司であること。

それゆえ、私たちの存在の目標は、これらの真理を一つずつ取り上げてみて、地域々々の集会が、世に対して、いかにすればこの真理をいきいきと描き出すことができるかを、見極めることである。

[illegible] サムエル・ライダウト「聖書による教会」より。

第四章　一つのからだであるという真理

地域教会が証しすべき責任を負っている第一の真理とは―

A一つのからだのみが存在すること。

どのようにすれば、キリスト者は今日、この真理を立証できるであろうか。

1おそらく、もっとも明らかな方法は、他のキリスト者から自分たちを分離させるような名を採用しないことである。コリントの教会において、ある人々はこう言ったのである、「わたしはパウロにつく」、「わたしはアポロに」、「わたしはキリストに」と。パウロは憤然として、「キリストは、いくつにも分けられたのか」と詰問し、かかる心の持ち方をとがめた（第一コリント一・一〇―一七）。

今日のキリスト者は自分たちを、国家とか、宗教指導者とか、聖礼典とか、教会政治の形態とかに従って名づけられた教派に分割している。これらすべては、キリストのみからだの一体性に対する実際上の否定にほかならない。

2神の子らにとって、はっきり言えることは、この問題の聖書的な取り上げ方は、聖書に記されている次のような呼び名以外は自分に対して用いないことである。―すなわち、信者（使徒五・一四、第一テモテ一・一）、弟子（使徒九・一）、クリスチャン（使徒一一・二六）、聖徒（エペソ一・一）、兄弟（ヤコブ二・一）。おそらく、キリスト者がその生涯を通じて、単なる信者という呼び名以外は一切用いないというのは、もっとも困難なつとめであろう。今日、大多数の人々が、何かの教派的組織の教会に属し、みことばのうちに記されている名よりもほかの名を用ている。神の子であるということ以外は、どのような名と呼ばれることをも拒む者は、だれでも、ほかのキリスト者の手からでさえ、非難の矢を向けられるであろうし、その奉仕の歩みには常に困難が山積しているであろう。しかもなお、信ずる者が終始一貫、その所信を貫くには他に何ができるであろうか。

3しかし明らかに、聖書的に確かな名を持つというだけでは、十分ではない。聖書に記されたことばをしっかりと守っていながら、しかも霊的には極めて分派的であるという可能性があまりにも強いのである。たとえば、コリントのある人々は、「私はキリストにつく」と言った。おそらく彼らは、自分たちの名の正しさに誇りを懐いたことであろう。しかし実際は、ほかの真の信者たちを排斥するために、キリストにつく者となっていたのである。パウロは、彼らもまた、パウロ自身やアポロに対しての忠誠を主張する人々と等しい誤りを犯していることに、気付いたのであった。

4 教派が聖書的であるかどうかという、疑問のことばを耳にすると、それでも、主は教会の中のいくつかの大きい派や、教派のあるものに、豊かな祝福を与えておられるではないかとの反対意見が、よく出てくるものである。百歩を譲って、これが真実であると認めるとしても、なお次の諸点を忘れてはならないのである。

a 主が祝福してくださることは、どのような場合にも、神の全面的な是認を意味している、ということはできない。みことばが受け取られる場合に、しばしば多くの過誤と不完全さがともなうとしても、主はご自身のみことばを尊重されるのである。もし、完全さが存在するところだけを神が祝福されるのであれば、祝福というものは全く存在しないはずである。それゆえ、何かのグループが主の祝福の御手に接したという事実は、そのグループのなしたすべてを、主が是認しておられるという意味にはならないのである。みことばは常に、それを伝える者より偉大なのである。

b 教会の中にある分派に対する主の態度は、コリント人への第一の手紙三の四にはっきりと示されている。「ある人が『私はパウロにつく。』と言えば、別の人は、『私はアポロに。』と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。」

c 教会内部の分派は大いなる害悪をもたらす。

(1)これらは交わりに対する人為的な障害である。

(2)すべての教会に対して奉仕のわざか役立つように、神から特別の才能を与えられている人々の活動を、それは制限してしまう。

(3)世の人々を困惑させ、「いったい、どっちの教会が正しいのか」との問を発せさせる結果となる。

マーカス・レインズフォードはその有名な著書「信徒のための主の祈」にこう記している。

私からすれば、教派や党派は目に見える神の教会の一致をできるだけかき乱し、妨害しようとする悪魔の試みの結果であって、それらはすべて、私たちの内面的な誇り、利己心、自己満足と共に、その根源を宿していると思われるのである。

ねがわくは神が私たちをゆるし、分派による不一致を正してくださるように！　宣教をつづけるキリスト者の間の不一致ほど、外部の世界に対して、つけこむ絶好のすきを与えるものはないのである。目に見える神の教会の、異なる教派や党派に属する信徒の間で、あるいは男の人たち、あるいは女の人たちが、互にいがみあい、争いに明け暮れしているのは、この世の人々が、信仰に対して目をむけた時に、もっとも大きな妨げの一つとなっている。世の人が見ていて、「ああ、このキリスト者たちはお互に何と愛し合っていることであろう」と言わずにはおられないようにする代りに、あまりにもしばしば、「ごらんなさい、彼らはお互いに何とあらをさがし合い、何と審さ

合い、何と悪意をいだき合っていることか」と言わせるような口実を与えているのである。

5 神の教会を形成するあらゆる部分から自分を切離し、しかも同時に、すべての神の人々に対して愛のこころを持ち続けていこうとすれば、それには非常な困難が伴うものであって、このことは、主のからだなる教会の一体性のために証人となる決意を固めた信徒たちが、必ず見出だす問題である。

「モーセの五書に関するノート」の著者、敬愛するC・H・マッキントシはこう記している。

もっとも困難なことは、強烈な党派心を、情愛の深さや優しさや寛容に結びつけること、あるいはまた、他の人が言っているように、「寛いこころをもって、狭い範囲の人々だけを支持する」ことである。これこそ、まことに困難そのものである。きびしく、妥協のない態度をもって真理を擁護しようとするとき、私たちは自分と共にある人々の範囲を狭めてしまいがちであり、それゆえ、こころをひろく暖かくもちつづけていくためには、寛容のこころにみちた包容力が必要となるのである。寛容のこころから程遠い思いをもって、真理のために論争するとき、私たちは人の心に訴えるところの一番少い片手落ちの証しをするという結果に終らざるを得ないであろう。ましたその反面、真理の犠牲において愛の深さを示そうとすると、そのこと自体が結局神の犠牲において、大衆にうける自由—しかも、もっとも無価値なもの—を表わしているに過ぎないことを立証するのである。[1]

註 1. 「断片集」の中の「つり合わないくびき」より。

W・H・グリフィス・トマスも、その著書「奉仕の生活と働き」において、同じ考えを述べている。

これらの原理を、神の真理の誤ることのない岩の上にしっかりとすえよう。しかし思い遣りのこころは、キリストのために生き、また労しようと努めているすべての人に対して、できるだけ広く注ぎかけるようにしよう。聖徒にふさわしい気品を備えた、インディアンのための使徒であるミネソタのフィプル監督の言葉は、終生私の念頭を去らないであろう。かの日にロンドンで聞いたあの忘れ得ない言葉はこうであった―「三十年来私は、私と異なる意見をもちつづけている人々のうちに、キリストのみ顔を見ようと努めている」。

6キリストのからだの一体性の、目に見える形の表われは、今日、しばしば耳にするような、数々の教会合同運動によってもたらされる性質のものではない。このような同盟や、協議会や、連合体は、聖書の偉大な真理の数々を危うくすることによってのみ、成功するのである。キリストの処女降誕、その罪なき人間性、そのあがないの死、その体の復活、その昇天して御座につかれたこと、およびその再臨を、否認する人々と結び合うとき、キリスト者の集会はその主を拒むのである。

7キリスト者の一体性の真の基礎は、キリストとその御言葉への共通の奉仕、献身である。キリストの栄光を私たちのこころが渇望してやまないなら、その時こそ、私たちは互に引き寄せられるのであり、その時こそ、「わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ

一七・二二）との、キリストの祈りがかなえられるのである。

これは、よく気がつくことであるが、海の潮が引いたあとには、広々とつづく砂浜のここかしこに、取残されて離れ離れになった小さな水たまりがあるものである。それらは、大きな波が打ち寄せてきて力づよくそのうちに抱擁してくれる時にのみ、一つに結ばれ、一体となるのである。私たちの心の分離、「私たちの不愉快な分派」も、そのようでなければならないのであり、また事実、そうなるであろう。神の愛の大波が私たちすべての、一人々々の生命の奥により深く、より豊かにうち寄せて来、その愛の大海の中にあって私たちは、永遠にやむことのない愛と喜びと平和についての神の思いを悟るのである。[1]

当面の、地域教会の責任とは、キリスト者の大多数が、真の教会はただ一つであるという事実を、否定することにのみ奉仕しているこの時代にあって、キリストのからだの一体性を証ししつづけることである。それは、霊と、原理と、実際行動とにおいて、自分たちの仲間のキリスト者をすべて認めていくことにより、達成できるのである。

註1. グリフィス・トマス「奉仕の生活と働き」より。

第五章　かしらなるキリスト

個々の地域教会が証人として立つべき第二の真理は—

Aキリストがみからだのかしらであられること。

今日、この事実を信徒はどうしたら証しできるであろうか？

1明らかに、人間的指導者を教会のかしらとしていただいてはならない。このことに対するもっとも明白な違反は、自分がキリストのみからだの、この世における一時的なかしらであると主張する、一大宗教組織の首長である。今日のキリスト者の大多数が、かかる主張の愚かしさに気づいており、しかもこの悪が、何らかの巧妙な形態をとって全キリスト教徒のあらゆる部分に滲透してきていることを見ているのである。

2キリストが教会の活動を統御し、教会の意志を決定し、あらゆる分野において主導的立場をとられるように迎え容れられているなら、その時キリストがみかしらであられることが、真に認められているのである。このように言うと、多くの人々の耳には、それが何か漠然とした、非実際的

なことのように聞えるかも知れない。どうして天にいます主が、地上における地域教会を導かれるなどということがあり得ようか、と。その答はこうである。すなわち、このようにして、辛抱強く主につかえている者たちに、主がそのみこころを示して下さらないことは決してないということである。まことに、このことは、信徒の側における豊かな霊的訓練を要求する。自分の手の中に問題をしっかりとにぎり、自分たち自身の計画を遂行する方が、どんなにか易しいことであろう。しかし忘れてならないことがある。新約聖書の原理は、ただ新約聖書の力によってのみ完遂され得るということ、また、寄り頼み、祈り、辛抱強く待ちつづける道の前でしりごみする人々は、この地の、この地上における地域集会を導かれる偉大な教会のみかしらを仰ぐ特権を、決して持つことがないという　とである。

3 この点において、キリストがかしらであられることを口先では信じているように振舞うことと、実際にこの事実を認識することとは、全然別個のことがらであるのを強調しなければならないのである。見かけだけは、キリストこそかしらであられるという真理のために、自分の血を流すかに見えて、ながら、しかもその実位、実質的には独裁者であって、そのことにより、この真理を拒否している人々もある。また教会において、公式の肩書や称号は持っていないものの、やはり強引に教会を支配している人やグループもある。デオテレペスはこのような人物であった（第三ヨ

ハネ九・一〇）。彼は人の上に立つことを熱愛し、ヨハネのような深い信仰の人に向かって口ぎたなくののしり、このような人々を受けいれようとせず、受けいれようとする人たちを妨げて、教会から追い出したのである。これは、かしらなるキリストに対する明白な否認であった。

4 教会の本部ということについても一言しておく方がよいと思う。**本部**ということばは、働きの中核と権威とを物語っている。教会の本部は、かしらなるキリストのおられる所である。すなわち、それは天にある。個々の地域教会は、管区会議とか、中会とか、協議会というような、一つの教会あるいは教会の集団の上に立って統御している、統制組織を素直に認めるわけにはいかないのである。集会の一つ一つが教会のかしらなる主に対して直接の責任を担っているのであり、その真理を否定するような**何ものであってもならない**し、**何ごとをなしてもならない**のである。

第六章　受けいれの基本方針

前述のように教会に関する第三の重要な真理は—

Cすべての信徒がからだなる教会の器官であるということ。

この真理を正確に忠実にあらわすことは、集会の責務である。集会が教え、また実践することはみな、すべてのキリスト者が一体であるという事実を否定するものであってはならない。地域教会は、いかにすればこの真理をあかしすることができるであろうか。このことに思いをひそめるなら、私たちは自分自身、他の人たちをその交わりの中に受けいれるときの基本方針に関連して、その問題が必然的に起こってくることに気づくのである。ここに述べようとしていることは、教会加入を認むべき基本方針として、一般に知られていることであるが、ここに含まれる原則は、およそ次のように要約することができると思う。

1普遍的原則は、キリストが受けいれておられるすべての人を、集会もまた受けいれなければならないということである。「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け

入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい」（ローマ一五・七）。　真の交わりの基礎となるものは、その人がすでにキリストのみからだのうちに受けいれられているという事実である。地域教会は、その人をわが教会のうちによろこび迎えいれることによって、この事実を目に見える形で表わしているにすぎないのである。

2 しかしながら、これには例外が一つもないというわけではない。

これにつけ加えるべき三つの必要条件が、新約聖書の教の中に示唆されている。

a 受けいれられる人は、その生活が聖いものでなければならない（第一コリント五・一一、一〇・二一）。不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしる者、酒に酔う者、略奪をする者を受けいれることは、明らかに教会の聖なる性格を非常にゆがめた形で表わすこととなろう。

b これと深い関連をもつことであるが、他の地域教会によって懲戒処分を受けた人を受けいれることは、全く不当なことであると言える（第一コリント五・一三）。これは、キリストのからだの一体性の否定に外ならないわけである（エペソ四・四）。除名された人が、主および主の民との交わりにゆがゆるされるまでは、異邦人または取税人同様にみなされるのである（マタイ一八・一七）

c最後に、その人はキリストの教えに関してしっかりした考えをもっていなければならない（第二ヨハネ一〇）。「あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。」ここで起こってくる疑問は、そのキリストの教えとは、どんな内容のものかということである。この聖句のうちには、このことは説明されていないけれども、私たちは、キリストの教えとは、キリストの御人格とみわざに関する偉大な真理を含むものだといってよいと思う。すなわち、それはキリストの神性、処女降誕、罪のない生涯、あがないの死、葬り、復活と昇天、再臨である。

そこで、これを要約すれば、こう結論できるであろう　地域教会はその交わりのうちに、すべての新生した信者、すなわち、その生活を聖く保ち、他の集会の懲罰を受けておらず、教に堅く立っているすべての信徒を、受けいれるべきである。

3 しかし聖書は、受けいれの問題について、この外にもいくつかの有益な指示を与えてくれる。地域集会は当然こうすべきである—

a信仰の弱い者を受けいれること（ローマ一四・一）。これは、道徳的にはどっちでもよいような問題について、いささかきちょうめんにすぎるキリスト者のことを言っているのである。例えば、菜食主義者だからと言って、排斥する理由とはならないのである。

b人によって分け隔てをすることなく、受けいれること（ヤコブ二・一―五）。聖書は、富める者に対しては特別の配慮をはらい、貧しい者にむかってはさげすみの表情を浮べることに警告を発している。これはまた、人種とか、社会的階級とか、教養とかに関する差別についても言えることである。差別は非キリスト教徒的である。

c知識によらず、いのちに基づいて受けいれること（使徒九・二六―二八）。交わりは、人がどんなに多くを知っているかではなく、むしろその人がいかによく唯一者を知っているかにかかっている。このように、アポロはエペソで、その知識は不完全であっても受けいれられたのである（使徒一八・二四―二八）。

d外面的な儀式ではなく、いのちに基づいて受けいれること。バプテスマは集会へ加わるための関門であるとはどこにも言われていない。バプテスマはすべての信者が受けるべきものであること（マタイ二八・一九）は真実である。とはいえ、私たちがもし、人は集会に受けいれられるためにバプテスマを**受けなければならない**と言うなら、その時にはやはり、神の御言葉の意味から逸脱しているのである。

e奉仕の様子によらず、いのちに基づいて受けいれること。あるキリスト者の奉仕の範囲が賛成できかねるものであると言うだけでは、地域教会の交わりがこの人を拒否する理由とはならな

いのである。ルカによる福音書九の五三を読むと、主イエスがエルサレムへ行こうとして、御顔をそちらに向けておられるという理由から、サマリヤ人がその主を受けいれようとしなかったことが記されている。彼らは神の法則よりも、党派心によって動いていたのである。

f救をうける前にはどんな人間であっても、それにはかかわりなく、その人を受けいれること。パウロは迫害を加えた人であったが、その前歴に左右されることなく、受けいれられたのである（使徒九・二七、二八）。オネシモはかつて盗人であったが、パウロは彼を受けいれるようにと勧めている。まえは酒飲みであり、とばくに浮身をやつした者であり、見捨てられた人々であっても、いまは回心している人たちに対して、集会のとびらを閉ざすときは、集会の真の意義は失われて、一個の社交場と化してしまっているのである。

g喜んで主にある信者を受けいれること（ピリピ二・二九）。本当に現実に即した意味において、主の体の器官のうちもっとも弱い者を遇する道は、主ご自身を遇する道に外ならない。

「これらのわたしの兄弟たち、しかももっとも小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」（マタイ二五・四〇）

4さてここで、例の問題が起こってくる。「ひとりの人が真に救われており、変わりにふさわしいものであるかどうかを、集会は果してどのようにして知るのであろうか」。これには少くとも五

つの解決策が考えられる。

a紹介の手紙を用いること（ローマ一六・一）。一つの集会から他の集会へと旅をつづけるキリスト者は、その信仰と歩みとをあかしする母教会の手紙を携行することによって、困難と無用の摩擦を避けることができる。

b二、三人の証人の証言（マタイ一八・一六）。もしある人が、地域教会において二人あるいはそれ以上のキリスト者に知られているならば、教会はこの人たちの推薦に基づいて彼を受けいれてもよいのである。

cただひとりの人の証言ではあるが、この人が集会から全幅の信頼を得ている場合。パウロは、フィベをローマ在住の聖徒たちに（ローマ一六・一）、また、エパフロデトをピリピの教会に（ピリピ二・二五―三〇）推薦している。

dキリストの使徒としての、その人の自己推薦（第二コリント三・一―三）。パウロは、イエス・キリストの使徒としてその地でよく知られていたので、コリントの教会に宛てた紹介状の必要を認めなかった。

eその集会自身が入念に調べ、審査すること。このことは、一つの集会が、おそらくは長老たちの口を通じて、あるひとりの人に、キリストに在る希望をなぜいだいているかの理由を尋ね、

その人のキリストへの信仰等を聞いただしてもよい、ということを意味する（第一ペテロ三一五）。かくて集会は、この人がキリストに属するものであるとの十分な確信を得てのちに、受けいれてよいわけである。

5ここでは受けいれの問題について語ってきたが、なお、この章をとじる前に、この主題に関連してよく起こってくる問題を、もう三つほど考えてみたいと思う。

aひとりの人間が救われているか否か、それを審査する権利が果して教会にはあるであろうか。

その答はこうである。それは単に権利であるばかりでなく、聖なる義務である（第二コリント六・一四、一七）。神の民の中に加えられることを願っている人々の霊的な姿を見極めるために、教会が正当な手段をつくすように求められていることは、明らかである。

b集会が受けいれて後に、その人が、この教会において誤りを教えるという事態が起こったらどうであろうか。

その時には、この教は、神のことばに基づいて公けに糾弾されなければならない（第一テモテ五・二〇）。新約の教会は、聖書が開かれているところにおいてのみ、その機能を果すことができる。かつまた、誤りを明るみに出して信仰を守っていくことのできる、信心深い長老たちを持つべきである（テトス一・九）。

c 地域教会がひとりの人を受けいれ、それ以後、この人が出席したりしなかったり、あるいは全くこなかったりする場合は、どうであろうか

まず第一に強調しなければならないのは、交わりとは、宝ごとを共に分ち合い、共々に保持していくことを意味しているということである。交わりに加わっている人々は、集会の生きた生活の中にはいり、責任の何を担い、果すべき務めを分ち合うべきである。厳格に言うなら、週に一度の礼拝に加わるだけでは、真実に交わりのうちにあるとは言えないのである。

受けいれられていながら二度とこない人について言うなら、この人自身、申開きをする義務があると同時に、集会もまた、この人に対して、教会の姿を忠実に霊的に表わし、その前に提示する責任をもつのである。こうしてこの人は、真理に従うつとめを義務づけられることとなる。

明らかに、受けいれとは複雑な問題であって、ここでは、中でも重要ないくつかの面に触れ得たに過ぎない。私たちは、ここに取上げてきた範囲がまだ不完全なものであることを念頭に置いて、次の主題に移ることとしよう。

第七章　教会の中にいます聖霊

第四に、地域教会は、教と行いとによって、次にのべる重要な真理を守って行かなければならない。すなわち—

D聖霊は教会のうちにいますキリストの代理者であること。

一見この事実は、キリストが教会のかしらであられるとの、前述の教理と重複し矛盾するかのように見える。しかしながら、これは両方とも真実なのである。キリストは教会のかしらであられるけれども、聖霊を、地上における代務者、代理として、遣わされたのである。それゆえ、すべての地域教会が、神の御霊に正当な場をさしげる義務がある。

このことは、現実にはどのようにして達成できるであろうか。

1まず第一に、集会は万事に御霊の導きを求めるべきである。すなわち、

a会けのあかしのための場所を選ぶ場合。

b守るべき集まりのかたちを整え、準備していく場合。

c 神のみことばに仕えるのに役立つ人材を見極める場合。

d 金を何に支出するかという問題。

e 敬虔な規律を保っていくという事がらについて、等々。

2 第二に、地域教会は御霊の主権を常に認めなければならない。それはすなわち、御霊はご自身の思いのままに行うことができるという意味である。かつ、また、御霊は、みことばに相反するような行動をとられることは全くないにもかかわらず、今後とも常に同じ方法で物ごとを遂行されるわけではない、という意味である。聖書に用いられている聖霊の象徴――火、あぶら、水、風――は、動いて止まない性質、前もって定め難い動きを物語っている。かくて賢明なキリスト者とは、聖霊がこの神の大権を行使されることを受けいれて、それに順応していくだけの幅の広い心をもつ者というべきであろう。

初代教会においては、その通りであったのである。しかし、間もなく人々は、「自由で、親しく共同の社会生活を営み、形式は最小限にとどめた」集まりに、不安を感じるようになった。こうして統制が加えられ、形式主義、儀式主義がとって代った。聖霊は消し去られ、教会はその力を失ったのである。

御霊の自由から人間的統制への移り変りは、感動的な力をもって語っている イムズ・デニーの言

葉に述べられている。デニー氏は相当長く書いているのであるが、それでもなお彼の記事は、注意深く学ぶ者に豊かに報いてくれることに、読者は気づくことであろう。「御霊を消してはいけない」との聖句を解明しつつ、彼はこう語っている。

ペンテコステの日に教会の上に聖霊がくだったとき、「舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった」。そして、彼らの口びるは、神の大能のみわざを明らかにするために開かれたのである。この大いなる賜物を受けている人は、熱しており、文字どおり、聖霊によってわきたっているさまが、記されている。このような初期の時代における新生は、新生であったのである。それは魂のうちに、今までは知ることのなかった思いと感情とを燃え立たせ、それとともに、新しい力の意識、新しく神を見る目、聖なることへの新しい愛、聖書と人生の意義への新しい洞察をもたらした。そして、しばしば、燃えるような言葉をもって熱烈に語る力が与えられたのである。コリント人への第一の手紙で、パウロはもっとも初期の、キリスト者の集会のことを記述している。その中には、だれひとり沈黙している者は不かった。彼らが一堂に会したとき、だれもが讃美の詩か、黙示か、預言か、異言を解く言葉を口にしたのである。すべての人が例外なく預言するように、御霊がひとりびとりに現われており、盛つ火の燃え立つ万全の備えがだれにもできていた。回心してキリスト者の信仰をもつに至り、使徒の福音を受けいれる者となるということは、その人に多少の変化を起こさせるというような、なまやさしいことではなかった。それは、彼らの性質を根底から揺り動か

したのである。彼らはもはや決して前と同じ人ではあり得ず、その内に熱情と炎とを秘めた、新しい生命を宿す新しい被造物であったのである。生来の性質とあまりにもかけ離れた状態というものは、（普通の意味で言うのであるが）うまくいかないことも多々あったに違いない。そのキリスト者は、聖霊の賜物を受けてはいたが、なお、依然として一個の人間であり、しかも、おそらくはあらゆる虚栄や愚行や野望や利己主義と苦闘しなければならない人間であったのである。何よりもまず、彼の熱心さが彼の生来の欠点を改善するどころか、かえって悪化させているかのようにさえ、見えたかも知れないのである。熱心さは、この場合、黙していた方がよいと思われる時にも彼を語る方へとかりたてたことであろう。―というのは、初代教会にあっては、話したい者はだれでも口を開いて語ったであろうからである。このことは、彼を祈へ、讃美へ、奨励へとかり立て、その結果、賢い人々にため息をつかせる形となったかも知れない。そして、こういった理由から、霊的な賜物を実際に生かそうとするのを、おしなべて思いとどまらせようとする傾向が、賢い人々と、自ら賢人をもって任じている人たちの間に、生じていたものと思われる。この人たちは、内なる火を心の奥に宿している人、その火が燃え立ち得るまでは心の安らぐことのなかった人にむかって、言ったことであろう。「自分というものを押えて、少しは自制をしなさい、こういう流行に熱中するのは、理性的存在である人間の名に値しないことである」と。

テサロニケの教会において、このような状況が普通のこととなっていたのは、疑う余地のないところである。こういう事態は、年齢や気質の相違から必然的に起こってくる。老人および冷静なタイプの人は、青年と

熱血漢とに対して、自然に、そしてまた疑いもなく神の摂理によって、つり合いを保っているのである。しかし経験と気質からくる分別は、御霊の恩寵に比べると不利な立場にあることは否めない。それは、冷やかで熱を欠いており、それ自体で伝え広める力をもたず、何ものにも火をつけて燃え広がらせることができないのである。そしてそれが、人間の魂に火を投じる力を欠いているからこそ、火のことばによって熱烈な思いがほとばしり出たときには、これに水を注ぐことが禁じられているのである。「御霊を消してはいけない」とは、この意味である。このいましめは、御霊が消される可能性があることを、前提としているわけである。冷淡な顔つき、軽べつ的な言葉、沈黙、計画的な無視は、御霊を消すのにあずかって力がある。思いやりのない批判も同様である。

だれでも知っていることであるが、火は、たきつけたばかりが一番煙のでるものである。しかし、煙が立たないようにする道は、その火に水をかけることではない。それは、火自体がよく燃えるようにしてやることである。もし、あなたが賢い人であれば、まきを並べ直したり通風をよくしたりして、火がおのずからよく燃え立つための手助けをすることもできるであろう。しかしながら、火が燃えているときに、大多数の人がとることのできる最も賢明な態度は、それをその燃えるに任せておくことであり、また熱い思いが火と燃えている使徒とともに、集うことである。おそらく、煙は彼らの目をいためつけることであろう。しかし、煙は間もなく消えてゆくのであって、その熱のゆえにしばらくの間の辛抱はできるのである。それゆえ、使徒の教は、御霊の恩寵―よいと信ずることへのキリスト者のひたむきな熱意を、もとよりこの世での最上のものと認めている

のである。それはあるいは、教えられもせず、経験もしなかったことかも知れない。およそ誤りという誤りは、みな犯しているかも知れない。人間の高く清い望みの上に、重くのしかかってきているさまざまの生活の、さし迫ったきびしい問題に対して、驚くほど盲目であるかも知れない。しかし、それは、神のためであり、発展する力を秘め、伝染力をもち、この世のあらゆる知恵にまさって霊の力としての価値をもつのである。

私はこれまで御霊の消される場合のいくつかに触れてきた。見方によっては教会の歴史が、このいましめに対する違反の長い長い連鎖であり、また同時にそれと符合して、御霊への反逆の久しい連続であったことを思い返すと、胸の痛むのを禁じ得ないのである。かの使徒は、他の箇所でこう告げている。「主の霊のあるところには、自由がある」と。しかし、共同社会の中にあっては、自由は危機にさらされている。それは、ある程度まで、秩序との戦に外ならないのである。秩序の守護者をもって任じる人々は、自由に対してあまり思いやりのある態度をとろうとはしないものである。それゆえ、この傾向は、教会史の非常に初期の年代にすでにあらわれ、よき秩序を守るために、教会において御霊の自由が早くも抑圧されたのであった。「支配の賜物は、アロンのつえのように、他の賜物をのみつくすかのように見える」と言われている。教会の支配者たちは、一般の教会員から完全に分離した階級となった。そして、教会を建て合わせて行くための霊的な賜物を活かすべての働きが、彼らのうちに閉じこめられてしまったのである。否、それどころか、恐るべき思想がうみ出され、教義として教えられたのである。すなわち、彼らだけが恵みと福音の真理の受託者であって（あるいは、時には管理者であるとも言っている）、彼らを通してのみ、人間は聖霊との交わりにあずかることができ

るというのであった。分りやすく言えば、キリスト者が礼拝のために集まる時に、御霊は消されたのである。一つの巨大なローソク消しが、兄弟たちの心の中に燃えるほのおの上に押しかぶさっていた。火はその姿をあらわすことが許されなかったのである。讃美や、祈や、熱烈な奨めの形をとって噴出し、神聖な礼拝の品位と秩序とを乱したりしてはならなかった…。―重ねて言えば、キリスト者の礼拝は非常に初期のころからこのような形態へと変形されて行ったのであり、不幸にもその大部分は今の今まで存続しているのである。私たちはそれによって恩恵を受けていると考えるべきであろうか。私はそうは思わない。時がたつにつれて、それは常に耐え難いものになってきている。二世紀のモンタニスト派、中世期の異端宗派、大英共和国時代の独立教派およびクエーカー教徒、ウエスレー主義の平信徒伝道者、救世軍、プリモス同胞教会、今日における福音主義の諸連合等は、みな、程度の差こそあれ御霊の抗議（プロテスト）である。御霊を消し、しかも御霊を消すことによって教会を弱めようとする権威に対する、御霊の正当な、必要に迫られた抵抗であったのである。1

註

1. ジェイムズ・デニー「聖書講解―テサロニケ人への手紙」より

3 かくて集会は、決して、反聖書的規則とか、型にはまったプログラムとか、儀式とか、形式的礼拝とかをもって、御霊を消してはならないのである。集会は一定の時刻に終らなければならないとか、礼拝はつねに一定の型にはまった様式で行わねばならないとか、礼拝の集まりの、ある段階における奉仕のわざは受けいれないとかいう、厳格な取り決めのために、聖霊は何としばしば

悲しい思いを余儀なくさせられておられることであろう！　このような規則は霊的な力の損失を招くだけなのである。

4 私たちは、ここで、ちょっと本をおいて、自分にこう問うて見ようではないか。もし、私たちの地域教会において、聖霊が本当に導き手としての全き信頼を受けているとしたら、どのようであろうか、と。C・H・マッキントシは、このような理想的状態を生き生きと描き出しているのであるが、それをここに引用したいと思う。

集会のあるべき姿は、ひとりびとりが聖霊によってはっきりと導かれ、ただ、イエスのみもとにだけ集うものであるとの概念を、私たちはあまりにも少ししかもっていないのである。かくて私たちは、集会がつまらないとか、沈滞しているとか、得るところがないとか、やり切れないとか言って不満をもらすようであってはならない。また私たちは、本能むき出しの冒瀆的なでしゃばりと、そのやむことのない行動とを恐れてはならないし、祈を製造したり、語らんがために語ったり、空白を埋めるために歓美歌を引っぱり出したりしてはならない。ひとりひとりが主の速かな来臨に際して自分の置かれている立場を、知っているはずである。—賜物を受けた器のひとつびとつが主の御手によって満たされ、適わしいものとされ、用いられており—ひとつびとつの目がイエスにまっすぐに注がれており—そして、ひとりびとりの心が主によって占められているのである。もし聖書の一章が読まれるとしたら、それは神の声そのものに外ならないはずである。もし一つの言葉が

語られるとしたら、それは心の上に力をもって迫ってくるはずである。もし祈がささげられるとすれば、それは魂を神の直前へと導きゆくはずである。もし讃美の歌が歌われるとすれば、それは霊を神のみもとへと引き上げるはずであり、そのしらべは天上の立琴をかき鳴らすにも似ているであろう。私たちは、自分が神の聖所そのもののうちにいることを感じつつ、やがて天上で主を拝し、二度とそこから出ることのない、かの時のことを、前もって味わい楽しむべきなのである。[1]

註 1. 雑文集の中の「神の集会」より。

第八章　教会の規律

もし地域教会が、神の教会の正確な複製であるとするなら、この教会は第五の重要な真理について、あかしを立てなければならない。すなわち—

E神の教会は聖であること。

しかし、どのようにすれば、このことを実際に即した方法で示すことができるであろうか。

1まず第一に、それは、この教会に加わっている人々の信心深い生活によって可能となる。これが根本である。神は、実際に清くなることを欲しておられる（第一テサロニケ四・三）。新約聖書のどの部分をひもといてみても、教会の真理が他の真理から孤立し区別された原則として示されていないのは、このような理由によるのである。むしろ、この真理は、多くの箇所に見出だされ、キリスト者の聖い生活のための実際的な教とともに聖書全体に分散している。主は、教会生活において形式的に正しい生活を送っている人々を、望んでおられるのではなく、真理を身をもって立証しつつ生きぬく人々を欲しておられるのである。

2その目的のために、地域教会は聖書の教のよき糧を貯えるべきである。この教は、あちこちから集めてきた断片の単なる寄せ集めであってはならない。それは神のみのことばの首尾一貫した、組織的な教でなければならないのである。このようにしてこそ、神がことばのうちに与えておられる**つり合い**のうちに、聖徒はみことばの**すべて**を受けるのである。

3健全で組織立った教は、集会のうちに芽生える罪に関する限りは、はっきりした予防効果をもつはずであるが、それでもなお、すべての地域教会が規律を守るために行動を取ることを余儀なくされる事態が、起こってくるのである。罪が、集会の平和やその共同生活のあかしに影響を及ぼすようになる時は、いつでも行動をとらなければならない。「なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ている」（第一ペテロ四・一七）のである。

4規律を守る行動は二つの主要な目的をもつ。

aキリスト者であると公言していながら、現実には依然として新生していない人々―たとえば、第一ヨハネ二の一九に記されているような人たち―を、衆目の前に明らかにして交わりから追放すること。

b誤りを犯した信者を、主のもとへ、そしてその地域教会へと復帰させるような方法で罰すること。教会の行う懲罰は、決してそれ自体に目的があるのではなく、常に、霊的な回復をなしと

げるための手段なのである。

5 新約聖書には、規律を守るためのさまざまな段階が述べられているので、次にそれを列記しよう。

a 他の兄弟に対して罪を犯した兄弟の場合は、まず、表立てないで処理すべきである。もし、この兄弟が聞いてくれないなら、その時は、ほかにもうひとりかふたりの人もその人のところに行くのである。この共同の証言も聞いてくれないような時には、その結果として教会の前に持ち込まれることとなる。そして、この最終的な行動まで徒労に帰するなら、その人は異邦人や取税人と同様にみなされるのである（マタイ一八・一五―一七）。

b 規律維持のもう一つの形は、戒めである（第一テサロニケ五・一四）。これは規律に服さない兄弟、すなわち、主にあってこの人の上に立つ人々に服することを拒む兄弟の場合に用いられる。

c それから、次の二種類の人々は**避ける**ようにと聖書は語っている。すなわち乱れた生き方の人（第二テサロニケ三・一一、一四、一五）と、分裂を引き起こす人（ローマ一六・一七）である。乱れて怠惰な人は働くことを拒むのであり、一方の人は、自分の子分に引き入れたり、私腹をこやしたりしたいために、神の民の中に分裂をつくり出すのである。

d 異端者は、一、二度、訓戒を加えた上で**退ける**こと（テトス三・一〇）。（これが懲戒の比較的

ゆるやかな形であるのか、それとも教会からの除名を意味するのかは、いくらか疑問のあるところである。）

e 次に、懲戒のもっともきびしい形—教会からの除名（第一コリント五・一一、一三）がある。これは、不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしる者、酒に酔う者、略奪をする者に対する処分として留保されている。

6 懲戒の問題で配慮しなければならない重要な事がらがある。それは、信頼するに足る証拠に基づいて公平に事件が取扱われているということを、確かめることである。この場合に適用される一般的原則は以下の引用にはっきりと要約されている。

私たちは、二、三人の証人の証言もなしに判断を下したりすることを、自分に対して決してゆるしてはならない。ましてや、それを口に出したり、それに基づいて行動したりしてはならない。どんなに信頼に値し、道徳的に信用のおける人の証言であっても、それがひとりであるなら、決定を下すための十分な裏付とはなり得ないのである。私たちは、自分たちが信頼し切っているひとりの人が断言したのだから、それは真実であるとの確信を心にいだいているかも知れない。しかし、神は私たちよりも賢いかたなのである。このひとりの証人は、絶対に曲ったことをせず、正直であり、また、だれに対しても、どんなことがあっても、真実でないことを語ったり偽証したりしたことがないかも知れない。これはみな、おそらく事実であろう。しかし私たちは、

「ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられる」という神の定めに忠実でなければならないのである。

神の教会において、この注意がもっと真剣に払われていたら、どんなによかったであろう！　懲戒のあらゆる場合において、また、だれかの人格や評価に影響を与えるすべての場合において、こうすることの価値は全くはかり知れないものがある。それは、どのような事件の場合であっても、集会が一つの結論に達し、あるいは他の判断に基づいて行動するのに先立って、十分の証拠の裏付けを求めて止まないのである。もしこの裏付けが、まだ不十分なら、すべてを神にまつべきである、―辛抱強く、疑うことなく。そうすれば、神は必ず必要としているものを与えて下さるのである。

たとえば、かりにキリスト者の集会のうちに、道徳的な惡や教理上の誤りがあるとして、ひとりの人しかそれを知らない場合に、もしこの人が本当に全く確かであり、事実に対する深い絶対的な確信をもっているとしたら、どうであろうか。どうすればいいのであろうか。それは、さらに多くの証人を神が与えて下さるのを期して待つことである。こうしないで行動に出ることは、神のみことばのうちに、くりかえしくりかえし、この上もなく明瞭に述べられている神の原則を破ることとなる。唯一の証人は、そのあかしが取上げられなかったからと言って、悩んだり卑下したりしてよいものであろうか。決して否である。まことに、そういうことを期待すべきではないのである。それどころか、ひとり以上の第三者の証言によって自分のあかしの確かさを立証できるまでは、証人として名乗出てはならないのである。ただひとりの証人のあかしに基づいて行動するこ

とを集会が拒否したからといって、その集会が無関心であり怠惰であるとみなすことができるであろうか。そうではない。もし、あえてそうしようとするなら、神の御命令に真向から反抗することになろう。

しかも、この実際的な大原則は、主の民の一集会に関する、さまざまな疑義や規律の場合に適用されるにとどまらないのであって、全世界的な、普遍的な、適用範囲をもつのである。私たちは、神から命じられている明らかな証拠の基準に立たないで、さばいたり断定を下したりしようとする思いをいだくことを、決して自分にゆるしてはならない。もし証言がすぐに得られる見込みがなく、しかも私たちにとって、この事件に断を下す必要が痛感されるとしたら、神は、時がくれば必ずや必要な証言をそなえて下さるであろう。ちょっと見るか、聞くかしただけの、たった一つの感覚的な証拠を根拠として訴え出た人のために、誤って訴えられた人のことを私たちは知っているが、訴えた人がもしその時、自分でもっとよく見、聞き、確めて、もうひとつかふたつの証拠を得ようと努めていたなら、この人はむしろ訴えを起さなかったであろうと思うのである。

註 1. C・H・マッキントシ「申命記に関するノート」

1この主題のもう一つの面、すなわち、規律の維持をやりとげる方法もまた、深く思いをひそめて考えてみる価値のあることである。

aこれを遂行するには、自分までも誘惑に陥ることのないように、深く自ら反省しつつ、柔和な心をもって事に当るべきである（ガラテヤ六・一）。

bそれは厳正に、公明正大でなければならない。たとえば、その当人が私たちに人情のきずなで結ばれているという事実によって、その問題に対する決定が少しでも左右されるようであってはならないのである。人を分け隔てし、手心を加えることはゆるされない（申命一・一七、ヤコブ二・一）。

c除名の場合は、集会が行動すべきであって、いかなる個人も行動に訴えてはならない（第二コリント二・六）。このようなかたちの懲戒が効果をあげるためのこころの在り方を、再びC・H・マッキントシの言葉から引用したいと思う。

ひとりの人を主のテーブルから除くというその行動ほど、厳粛な、また、胸の痛む出来事はあり得ない。それは集会全体の、最後に残された、悲しい、避けられない行動である。心くずおれて、目を涙きはらしつつ、この悲しいつとめは果されねばならない。ああ、そうでないとしたら、何としばしばこういうことが行われることであろう！　何某という人が交わりから除かれたとの一片の形式的発表をもって、このもっとも厳粛な、聖なる任務が、あっさりと片付けられていることが何と多いことであろう。このようなやり方で実行された懲罰が、誤りを犯した当人にも、集会の上にも、力をもって臨み得ないのはあまりにも当然なのである。

では、どのようにして、懲戒を行うべきであろうか。それは、コリント人への第一の手紙五章の命ずる通りである。この事件があまりにも明白で、疑う余地のないものであり、しかも証拠に証拠を積み、証人に証人を

重ねてその結論に達したときに、この特別な目的のため、集会の全体会議が厳かに召集されなければならないのである。―なぜなら、これこそ特別な集まりを召集するに値する、きびしく重大な問題であることは明らかだからである。すべての教会員が（もしできることなら）、この集まりに出席し、この罪を自分たち自身の罪として負いつつ、真の自己批判のうちに神のみまえに自分を投げ出すことのできるように、み恵みを求め、罪祭を捧げるべきである。集会は書議や討論のために召集されるのではない。事の次第が余すところなく調べつくされ、すべての事実が、キリストと主の教会のために労をとっている人々によってまとめられなければならないのであって、それが完全に整えられ、その証拠が絶対に動かないものとなったときにはじめて、その悪い行動に出たものを自分たちの中から除くという、悲しい決定を遂行するために、全体集会が、深い悲しみと打ち砕かれた心をもって、召集されるのである。それは主の御命令に対する聖なる服従の行為である。[1]

註 1.「雑文集」の中の「集会の規律」より。

8 最後に、大切なことは、キリスト者は交わりを共にしている人の罪を吹聴すべきではなく、むしろ、外部の人が関心を示している限りは、その罪と懲罰とをすっぽりと覆いかくす、思いやりの着物をかけてやるべきであり（創世記九・二三）、それは、あえて強調するまでもないことである。集会は罪が見出だされたときに決断的行動をとってはじめて、聖なる神の宮の構図としての真の

性格を維持することが期待できるのである。

ここに、もう一言つけ加えておこう。それは新約聖書が、すべての信者は何れかの地域教会に属するものとしていることである。そうでないなら、その人はどの集会の規律にも制約されず自由であるが、このような自由は、個人にとってこの上もない危険をはらんでいるものなのである。

第九章　教会の発展

教会に関するもう一つの重要な真理、すなわち、地域集会が果さなければならない機能について考えてみよう。それは—

F賜物は教会の徳を高めるために与えられているということ。

1徳を高める—薫陶するということは、成長とか発展とかいう意味を含んでいる。それゆえ、この点に関して神のもっておられる、教会の発展に対する御計画に、私たちは心をひかれるのである。

教会こそ、神がこれを通してキリスト者の信仰を広めようとしておられる、今日の地上における単位である。各教会が、常に発展し、新しい層をつかみ、みずから成長し、また、同時に多くの集会の芽をも育成していくことに心を用いなければならないのである。

以前にも指摘したように、教会のかしらなる復活の主が、教会のために賜物をそなえて下さっており、これらの賜物が本来の機能を果し得てはじめて、教会は成長をとげていくのである。

2 初期には五つの賜物—使徒、預言者、伝道者、牧師、教師—が存在したことは、前述のとおりである。そして、その時にもちょっとふれたように、そのはじめの二者は、もともと教会の基礎をすえるための、初期の賜物であり、普通の意味では、神のみことばが書物の形にまとめあげられて完成した時をもって、その必要が終ったものであると思われる。

ということは、私たちの現代にあっては、三つの賜物—伝道者、牧師、教師が存在するということになる。私たちはもう一度これらの賜物のもつ目的と、それがどのように機能を果していくかについて、考えたいと思う。

3 賜物の目的は、エペソ人への手紙四の一二、一三に示されている—

それは聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

さて、この聖句のはじめの箇所は、欽定訳聖書[1]によると、賜物がなぜ与えられたかという理由が、一見、三つに分かれているように受けとられるのである。すなわち—

a 聖徒たちをととのえるために（for the perfecting of the saints）

b奉仕のわざのために（for the work of the ministry）

cキリストのからだを建てるために（for the edifying of the body of Christ）

訳者註1. 一六一一年以来、もっとも広く用いられている英語聖書。現行の日本語訳聖書は、文語改訳聖書も口語訳聖書も改訂が加えられており、この欽定訳聖書とは異なった表現をとっている個所もある。この場合もそうである。

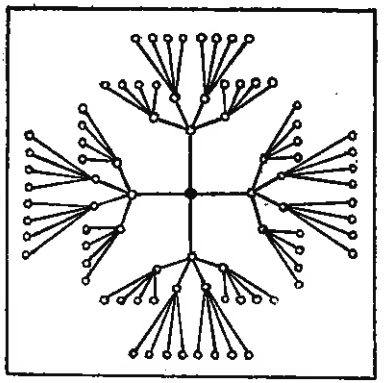
しかし、これがこの聖句の教えている意味であろうか。そうではないのである。他の訳の聖句を学ぶと、そのことがはっきりする。

たとえば、改訳聖書では、それぞれ別個の目的を示す"for"（ために）という言葉を用いる代りに、二番目と三番目の場合は、第一の場合を補う意味の言葉"unto"（ように）という表現を用いている。そこで、この聖句は次のように読み替えられるわけである。

キリストのからだを建てるように、奉仕のわざをするように、聖徒たちをととのえるために。

賜物がなぜ与えられたかといえば、それは三つの互に無関係な理由からではなく、ただ一つの理由によることが、ここで明らかとなった。―すなわち、聖徒たちを信仰のうちに建てて奉仕のわざをさせ、キリストのからだが、数的にも霊的にも建てられていくように、奉仕のわざを行うものこそ聖徒である。

この真理は図をもって説明することができよう。中央の黒マルが、たとえば教師という賜物をあらわしているとしよう。この人は、自分の周りをとり囲んでいる人々に向かって、この人たちがととのえられるように、（すなわち、信仰のうちに建てられるように）、そして他の人々に対する奉仕のために前進できるように、その奉仕の責めを果すのである。このようにして教会は成長し発展する。これが神のお与えになった方法であり、最小限の時間のうちに最大限の人々にまで福音を及ぼす道なのである。



神の与えられたこの型に従って、伝道者、牧師、教師は、他の人々もまた奉仕のわざを行うようになるよう、その心にふれつつ、訓練し、ととのえていくことを常に念頭においているのである。

すべてのキリスト者が、伝道者、牧師、教師としての賜物を授かっているのではない。にもかかわらず、なお、すべての人がキリスト者としての奉仕のつとめを負うている。教会の全員が礼拝者であり、魂を勝ちとる人であり、聖書の研究者であり、信仰の宣伝者である。

この重要な責務は、テモテへの第二の手紙二の二において更に強調されている。

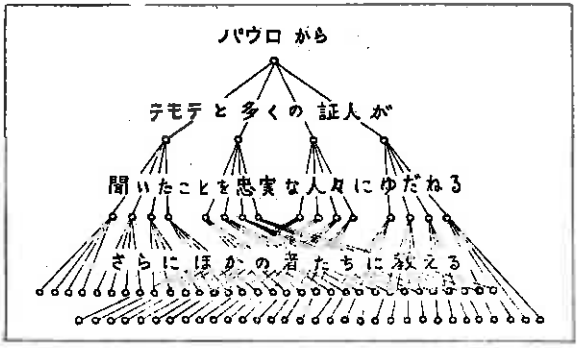
多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだね

なさい。

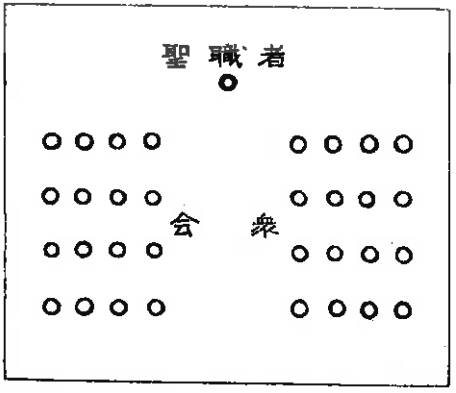
このことは、下のように図示すことができる。

4さて、このやり方は、すぐにはっきりした利益をうみ出すのである。それは、キリスト者の信仰が、非常な勢いで広まるという結果となってあらわれる。個々のキリスト者が、神から賜わった恵能を活用することによって、ととのえられ、成長をとげるのである。そして、このように成長することによって、今日の世界を風びしている、誤れる礼拝方法に関する教に、心を動かされることがますます少なくなる。そして、このように発展し成長した教会が、地上におけるキリストのからだを、一そう明確にあらわすのである。

5今日、キリスト教界においてもっとも一般的な教会組織を、これと対比してみよう。ひとりの人が、教会の聖職者として選ばれる。この人は献身し、回心者にバプテスマを授け、聖餐の礼典をつかさどり、その他、集



会の果すべき宗教上の多くの義務を遂行するのである。人々は来る週も来る週も忠実にその説教に耳をかたむける。しかし、あいにくにも、非常に多くの場合、この人々は、自分の代りにこういう仕事を引受けてくれるほかの人に、ちゃんと報酬は払っているのだからという口実をもうけて、自分が積極的にこの仕事にあずかることには、全く気が進まないかのようである。つまり、この人たちは、神のみことばの真理に対して少しばかり実際的な、個人的知識をもった、説教の吟味の専門家となるわけである。そして、つねに存在する危険は何かと言えば、福音的環境の中にあって、このような人々が、「人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりする」単なる「子供」（エペソ四・一四）のままの状態に、なおもとどまっているということである。



いまここで語っているような、現在の組織は下のように図解したらよいと思う。

ここにおいては、聖職者が自分の会衆をその手に治めており、会衆は義務的に礼拝に出席す

る。しかし、それが終ると、今、回、たことに対しては、個人としての責任をごくわずかしか感ぜず、あるいは全く感じることなく、家路につくのである　明らかに、一人の聖職者がこのような立場でできることは、非常に限られている。その反面、もし、この人々がみな、主の御為に積極的に活動するとしたら、その進歩はめざましいものがあるであろう。

アレクサンダー・マクラレンが次のように書かずにはいられなかったのは、右のようなことを考えぬ、たからである。

私は、教会の公けの場での教というものを、正式の授業時間といった性格のものに局限してしまっている現状は、害毒を流していると断ぜざるを得ない。なぜ、ひとりの人がいつもいつも一切合財を語り、教える力をもっている何百もの人々がおしのように黙りこくって、彼の言葉を聞くか、それとも謹聴している風をよそおっていなければならないのであろうか。私は、無理強いによる改革はきらいであるし、また、強い力によって一掃する必要のある組織　政治的組織であれ、聖職者の組織であれ　が、今にも取除かれるだけの情況にあるとは思っていない。しかし、私たちの間において、霊的生活の水準が高められるなら、新しい形態が自然に進展していくであろうし、そこにおいてこそ、キリスト教の民主主義が根ざしている大原則がいっそう明確に認識されるはずである。　それは、すなわち次のみことばである。「わたしの霊をすべての人に注ごう。」そ

の時にはわたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう」[1]

註1. 「聖書講解―コロサイ書およびピレモン書」より。

6 ひとりの人による奉仕のわざについて、このように論じてくると、次の疑問が浮かび上ってくる。「聖職組織とはどういうものだろうか。聖書的なのであろうか?」と。まことに当を得たこの問への答を、いま探ってみることとしよう。

聖職者とは、神への奉仕のために、人間の側から立てられ、他とは区別されている特別な階級の人々であって、普通の場合、教会の礼典や諸儀式を一手に遂行する唯一者の権威が与えられていることを意味している。

まず初めに当って、聖職の地位にある多くの人々が、抜きん出たキリストの僕であり、主のために役立つすばらしい働きをしていることを、喜んで認めようと思う。私たちはこの人々のうちの多くの人に対して、またその奉仕のわざに対して、聞くことからも書物からも、非常に多くを受けていることを、心から深く感謝しているものである。この人々はみな主イエスを信ずる人々であって、私たちの兄弟として受けいれることに、やぶさかではないのである。

しかし私たちは、聖職者という思想が新約聖書の中には見出だされないという事実を、正直に

真正面から直視しなければならない。ただひとりの人が教会を託されているということは、新約のどこを見ても、見当らないのである。（テトスへの手紙の最後に、英語版の欽定訳聖書では次のような但し書がついている。「この手紙は、マケドニヤのニコポリスから、クレテ人の教会の最初の監督に立てられたテトスへ宛てて書かれたものである」。しかしながら、だれひとり、この但し書きが原本にも書かれていると主張することができないのである。これは訳者によってつけ足されたものであって、もちろん聖職主義のためにする片寄った意見の持主の手になるのである。改訳聖書にあっては、この箇所は全部削除されている。）

聖職という思想は、新約聖書に拠り所をもたないだけでなく、かえって、新約聖書の教に反していると私たちは信じている。

aまず第一に、それは、信ずる者のすべてが祭司である（第一ペテロ二・五、九）との原則を犯すものである。

旧約聖書においては、神と人々の間に立つ、特別の分たれた階級の人たちがいた。キリスト教においては、すべての信徒が祭司であり、祭司の職にともなう特権と責任のすべてをもっているのである。事実上、ひとりの人による奉仕という思想は礼拝を沈黙させるのに効果的であり、祭司なるキリスト者の、奉仕つわざをさまたげるのである。

b第二に聖職組織は、奉仕のわざを専断的に、ひとりの人またはひとつの公的なグループに限定し、そうすることによって教会の内にある賜物（第一コリント一二章、一四章）の自由な行使を禁じている。

cまた、礼典諸式の運営を祭司的階級に制限している。しかし実際は、聖書はこのような区別を立てていない。

d俸給を受けて奉仕につくすという原則は、聖職組織にはほとんど避けられないことであるが、それはこの人の上に立つあるひとりの人、または上層部の人々に対する責任を、必然的に包含するものなのである。この上に立つ権威は、威圧的な、作為的な、非霊的な学識の高さをふりかざして、聖職者に圧力を加えることもあるであろう。たとえば、ある聖職者の成果を、その年のうちに教会員名簿に加えられた人数の多少で判断するというのが、普通のこととなっている。これは単に、奉仕の成果をはかる真のはかりでないばかりか、かえって見せかけをよくするために受けいれの水準を引下げたいという強い誘惑をつくり出すものである。キリストの僕は、このように束縛され、足かせをはめられ、さまたげられていてはならないのである。主の僕は、つねに主に属して自由に行動し得る人（ガラテヤ一・一〇）でなければならない。

e聖職主義は、主の御名の代りに、ひとりの人のところへ人々を集めようとする危険に、つねに

直面している。もしひとりの人が、地域教会において人をひきつける魅力をもっているとすれば、その魅力はその人が去るとともに消えうせる。もし、その反対に、聖徒たちが、主がそこにいますという理由から集まるとすれば、その時こそ、この人たちは主のために忠実に尽すであろう。

f 理屈はさておき、実際において聖職者は、キリストがかしらであられる（エペソ一・二二）との真理を効果的に弱めるために奉仕してきており、場合によっては、その真理を全く否定さえもしているのである。

g もし、新約聖書の中の監督が、今日の聖職者と同じものであると主張する人があるとすれば、私たちはこう答えるであろう。すなわち、新約聖書は一つの教会のうちに、何人もの監督がいることを予期している（ピリピ一・一）のであって、ひとりの監督が、一教会あるいは教会の集団を統轄するのではない、と。

h 聖職の地位にある多くの人々が、教会への賜物となったキリストの僕であることは、否定できない事実である。しかしながら、この人々は、人間の指名や任命によってではなく、主イエスご自身のみわざによって賜物となったのである。聖徒たちが活動的な奉仕へと建てられていくように、奉仕のわざに励む責任が監督にはあるのであって、それは、聖徒たちが、いつまでも

彼らに依存するようになることがないように、するためなのである。

i 神に召されていない人々を人間的に聖職にたてることから、自然と流れ出てくる悪はすでに明らかであって、ここで詳しく論ずるまでもないことである。

j 最後に、ひとりの人が、教会の教える面での奉仕に、主な責任をもっているところでは、それを抑制したり、他の人とのつり合いをとったりする組織がないために、教義それ自体が悪ではないとしても、一方的な解釈に走る危険が多分にある。その反対に、聖霊が教会における数々の賜物を通して語る自由をもつところでは、真理のさらに多くの面が照らし出されるわけであり、すべての聖徒がたゆみなく聖句と聖句とを較べ合わせていくところでは、かなりの程度まで誤りから免れているのである。

このように、聖職組織を代表する人々の奉仕のわざからは、しばしば多くの祝福があふれてはいるものの、それは神の最上のものではないばかりか、教会のこよなき益にとって重大な害悪となっていることを、私たちは信じないわけにはいかない。

神の方法は、まず賜物に向かい、その賜物が聖徒たちに奉仕のわざをなし、そののちに聖徒たちが順々に奉仕のわざを行うために前進していくのである。地域集会は、この重要な原則を認識すべきであって、その自由な発展を妨げることは何一つしてはならない。聖徒たちがこの

ように奉仕に勤むとき、未信者は救われ、聖徒たちは徳を高め、そして、新しい集会が必ずや生れでるであろう。

第一〇章　祭司としての信徒のつとめ

最初に挙げたように、教会に関する真理の第七のもの、すなわち、最後の真理は—

G信ずる者はみな神の祭司であること。

あらゆる地域集会が、他のいかなる祭司職をも拒み、また、すべての信者に対して、個人的にも集団的にも、この神から与えられた任務の特権と責任とを果すようにと励まし、そのことによって、この真理を実際にあかししなければならない。

1旧約聖書において、モーセの律法は、レビの一族とアロンの家の者を民の祭司として、特別扱いにしている。この人たちは、区別のはっきりと判る着物を着、特権を与えられ、神とイスラエルの会衆の間に立ってとりなしをする特殊階級として立っていた。この人たちだけが聖所にはいることができ、律法によって命ぜられている犠牲のそなえ物をささげ得たのである。

2キリスト教の信仰にあっては、すべてが一変した。今や信ずるすべての者が、新約聖書によれば、祭司なのである。すなわち—

aペテロの第一の手紙二の五「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」

bペテロの第一の手紙二の九「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」

cヨハネの黙示録一の五、六「私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と栄えとが、とこしえにあるように。アーメン」

マルチン・ルーターは、全信徒が祭司であるという真理を擁護して熱烈に主張し、こう記している—

信ずる者はすべて、ともどもに祭司である。その人がキリスト者であるということを外にしては、いかなる祭司らあり得ないということを主張し、そのために呪われて破門されるとすれば、それはむしろ喜ぶところである。なぜなら、その破門は、神のみことばによることなく、人々の言いならわしとか、古来の慣習とか、そんなふうに考えている数の人々の力とか以外には、何の権威のより所もなく、主張されるであろうならばあ

る。[1]

註1. W・ホースト氏による引用「監督、祭司および執事」より。

3祭司の重要なつとめの中に、犠牲をささげる職務がある。旧約聖書にあっては、そのいけにえは大てい幾種類かのほふられた動物で成立っていた。今日においては、それとは対照的に、信者のいけにえは次のようである—

aその人自身のからだのいけにえ（ローマ一二・一）。これは死んだ供え物ではなく、「神に受け入れられる、聖い、生きた供え物」である。

b物質的な、持てる物のいけにえ（ヘブル一三・一六）。「善を行なうことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです」。

cさんびのいけにえ（ヘブル一三・一五）。「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか」。

このさんびのいけにえは、個人としても会衆一同としてもささげられるべきものである。後者—会衆一同の礼拝—は、信者が公けにそのさんびにあずかる自由があるのであるが、現代にあっては、型にはまった統制された礼拝形式によって、それが実質的に締出されてしまってい

る。その結果は、おしのように物言わぬ祭司の時代―聖書のどこにもふれられていない状態を、呈しているのである。

4 祭司の他の任務は、祈と、神のためのあかしと、神の民の世話をすることとを含んでいる。かくして信徒たちは、この神から与えられたつとめを、うむことなく実行し続けていくべきなのである。

この主題に関する聖書全体の教（ローマ八・一四、ガラテヤ五・一八、ヨハネ一六・一三）が明らかにしていることは、このつとめが、単に主の日に限るものでなく、その週の一日一日、またその一日の朝から晩まで、私たちの生活全体にあてはまるものであるということである。それは、礼拝のための集会とか、聖書を読む会とか、祈の会とかいった教会集会が、はじまってから終るまでの間に限られているのではなく、人間としての全生活を含み、集会室とか講堂とかチャペルとか会堂とかの内部だけでなく、外部にも及ぶものであることは、確かである。全くかけ値のない意味で言って、新約聖書の神の民全体が、「祭司の国」であり、「聖なる国民」なのである（出エジプト一九・六、第一ペテロ二・五―九）。1

註 1. エーリヒ・ザウアー「信仰の闘技場にて」より。（日本語版、長谷川真氏訳「ヘブル人への手紙」一七〇ページ参照）。

5 すべての信徒が祭司であることは真理であるが、それにもかかわらず、すべてのキリスト者が一人の祭司を必要としていることも、また真理である。キリスト者は、その必要が主イエス・キリストにおいて全く満たされることを見出だすのである。ヘブル人への手紙は、この聖化された唯一者を偉大なる祭司として記述し、すべてのことについて、わたしたちと同じように試錬に会われたので、私たちの弱さを思いやってくださることができるのであり、しかもなお、罪のないかたであったと記している（ヘブル四・一五）。

6 かくてすべての地域教会が、主イエスこそ至高の大祭司であり、かつ、またすべての信徒が、聖なる、神につける祭司であることを認めなければならない。しかし、今日のキリスト教界において、私たちの目にはいるのはこのことであろうか。それどころか、教会がユダヤ教的祭司制度へと逆戻りしていることに気付くのである。キリスト者がみな祭司であることを信ぜよと口では宣べ伝えつつも、多くの教会は、主としてモザイク建築のように組立てられた組織の上に立って、その教会自体のはっきりと区別された祭司の地位を築いてきたのである。こうして、私たちの時代にあるものは—

a 神への奉仕のために特に分けられた人々から成る特殊階級。

b 平信徒との区別を立てる聞こえのよい肩書をそなえた、教会の官僚的上層部の聖職組織。

cこれらの人々が、異なった秩序のもとにある者なのだという区別を示す聖職者の服装。

また、これに加えて、教会は次のような概念をユダヤ教から借りてきている—

a入念に造られた祭壇のある聖別された建物、聖職の飾り、礼拝に物質的な助けをかりること。

b本能的な感覚に訴える印象的な儀式。

c聖なる日と季節をもつ教会暦。

この無茶なユダヤ教とキリスト教との混合のことを、C・I・スコフィールド博士はこう述べている—

教会のユダヤ教化は、それ以外の原因のすべてをあわせたよりもはなはだしく教会の進歩を妨げ、その使命をはばみ、その霊性を破壊してきたと言っても、過言ではないであろう。教会は、天からの召しにふさわしく、世から離れて主に従う道を、命ぜられたとおりにひたすら追い求めていく代りに、その目標を低めて、世の文化と、富の獲得と、人目をひく儀式と、壮麗な教会堂の建築と、軍隊の争闘の上に神の加護を祈ることと、平等な兄弟の身分を聖職、平信徒に二分することとに熱中し、その自己の立場を正当化するためにユダヤ教的聖句を用いているのである。[1]

註1.「聖書正解」より。

いま、神の民への神の召しは、ゆゆしきが主イエスの御名にのみ生甲斐を感じるものとなるために、形と影ばかりの宗教から自分を分離することではなかろうか。

7次のような教会だけが、新約聖書の、全員が祭司であるとの真理にあずかるものであることを、十分に認識しているのである。すなわち、

御霊に満たされ、規則正しく、盛んな祈禱会をもつ地域教会—

その教会員が、世界的な広がりの刈入れの場に立つ主の僕らの実質的な助力者であり、同労者であるような地域教会

福音の宣教において、トラクトの配布に、個人のあかしに、また、できる所でさえあれば野外集会に、辛抱強く、力強い活動をつづける地域教会—

暖いこころと、愛に満ちた霊的な雰囲気のうちに、すべての者が互に助け合い、祈をこめたまごころをもって同胞愛に生き、お互が愛とよきわざとの刺激を与え合うように心掛けている地域教会—

このような地域教会においてこそ、集まりと礼拝もまた聖霊の導きのもとにあり、かつ、聖霊の賜物が、主御自身から与えられたものとして、神が命じられた多様性のうちに花咲き、兄弟らしい交わりへ、キリストへの服従へ、また、このような御霊の聖なる自由へと発展していくのである（第一コリント一二・四—一一、一四・二六）。そして教会が、ゴルゴタで主が祭司のいけにえをささげられたことをさんびしつつ、主

のテーブルに共に集うとき、教会の全員が祭司であるとの特権をかちえて、祭司の礼拝は天の聖所にまで昇りゆくのである。1

註1. エーリヒ・ザウアー「信仰の闘技場にて」より。（日本語版、「ヘルブ人への手紙」一九四ページ参照）

すべての地域教会が身をもって現わし、実践すべき、世界教会に関する七つの主な真理について、私たちは学んで来たのであるが、それは、この祭司の項で終ったわけである。他の真理を挙げることもできたのは言うまでもないことであるが、地域集会が、キリストの全きみからだに関する真理のすべての、複写であり模型であるべきことを示すには、これら七つの真理で十分である。

次章からは次の問題をとりあげて行くこととしよう。

教会の儀式
祈禱会
監督と執事
教会の財政
婦人の奉仕

そして、結びの章は、「主のみもとへと進もう！」と題したいと思う。

第一一章　教会の儀式

キリスト教会の二つの儀式は、バプテスマと、聖餐（主の晩餐）とである。この二つは福音書において命ぜられ（マタイ二八・一九、ルカ二二・一九、二〇）使徒の働きにおいて実行に移され（一〇・四七、四八、二〇・七）書簡において詳しく説明されている（ローマ六・三―一〇、第一コリント一一・二三―三二）。

かくて、この二つの儀式の第一は次のようである。

1信者のバプテスマ

Aバプテスマという主題を考えていくに当って、はじめに注意しなければならないのは、新約聖書に、バプテスマの三つの主な形式があることである。

1まず第一に、ヨハネのバプテスマ（マルコ一・四）がある。きたるべき王の先駆者として、ヨハネは、イスラエルの民にむかってさけび、悔い改めて、悔改めにふさわしい実を結ぶようにと呼びかけたのである。ヨハネのもとに来た人々は、その罪を告白し、悔改めのバプテスマを受けたの

であり、かくて、その民の不信心な状態から自分たちを分離したのであった。

主イエスは、ヨハネからバプテスマを受けられたが、それは、主が悔い改めるべき罪を犯しておられたからではなく、悔い改めたイスラエルの残りの者たちと、ご自身とを一つに結び合わせて、すべての正しいことを成就されるためであった（マタイ三・一五）。

2 第二に、信ずる者のバプテスマ（ローマ六・三、四）がある。これは主の死において、キリストと一体化することを意味するのであって、後ほど詳しく論じていくことにする。

3 第三に、聖霊のバプテスマ（第一コリント一二・一三）がある。これは、神の御霊の主体的なみわざであって、救主を信ずるすべての者が、これによってキリストのからだに合体されるのである。

これら三つのバプテスマと関係して、心に留めておくべきことがある。それは—

ヨハネのバプテスマは、御霊のバプテスマと同じではないことである。この両者は、マタイによる福音書三の一一において、はっきりと区別されている。

ヨハネのバプテスマは、信者のバプテスマとも同じではない。使徒の働き一九の一—五はヨハネの弟子としてすでにバプテスマを受けた人々が、キリスト者のバプテスマをもう一度受け直さねばならなかったことを示している。

聖霊のバプテスマは、信者のバプテスマと同じではない。多くの人は、水のバプテスマが御霊のバプテスマの模写であり描写であるとの、ばく然とした考えをもっている。しかしこの両者は全然異なるのである。御霊のバプテスマは、キリストのからだへの合体を語っており、それに反して信者のバプテスマは死の型である。

要するに、これら三つのバプテスマの様式はみな異なるのであって、混同すべきではないのである。

B新約聖書はペンテコステの日以後は、主イエスを信じた人以外にバプテスマを受けた人のあることを語っていない。次の点に注意していただきたいと思う。

1「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた」（使徒二・四一）。

2「しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた」（使徒八・一二）。

家族がバプテスマを受けたことに言及している箇所があることは事実である（使徒一六・一五、第一コリント一・一六）。しかし、これらの家族がまだ主イエスを全く信じていない子供まで含んでいると思われるような形跡はないのである。

C信者のバプテスマの基本的な意味は、ローマ人への手紙六の一―一〇に余すところなく説き尽され

ている。この聖句の教は次のように要約できると思う。

1 イエスは死なれたとき、あたかも波の下へ、神の怒りの下へとはいって行かれた（詩四二・七）。

2 イエスは私たちの代理者として、このことをなされた。

3 キリストが現に私たちの代りとして死なれたのだから、私たちは、主が死なれた時に自分も死んだと言うことができる。

4 死によって、キリストは罪に関する問題の全部を、一度にすべて解決された。

5 それゆえ、私たちもまた、罪の問題全体に対して死んでいるのである。罪はもはや私たちに対して何も要求することがない。

6 神は、すべての信者をキリストと共に十字架につけられているものとして、見ておられる。信ずる者が肉につける罪人であったときのすべてが、十字架につけられてしまっているのである。

7 バプテスマにおいて、信者は、すでにどんなことが起ってしまっているかを劇的に例証する。水の下へとはいっていくことによって、事実上こう言っているわけである。「私の罪のゆえに、私は死に値するものです。しかし、イエスが死なれたとき、私も死にました。私の古き人、古き自分は、イエスと共に十字架につけられたのです。イエスが葬られたときに、私もまた葬られました。そして、私はいま、古き私が、日々の行為いろいろとも、永遠に神の御前から取り除かれねば

ならないということを、認めます」。

8そうしてのち、ちょうどイエスが死からよみがえられたように、信者もまたバプテスマの水から上ってくるのである。そうすることによって、この人は、新生のいのちの新しき中へと歩みゆく決意を象徴的に表明するのである。もはや自分を喜ばせるために生きることなく、むしろ、信者として主のいのちを生きることができるように、自分のいのちを救主のいのちへと転換するのである。

このように、バプテスマとは、いままでの生き方の終末を象徴する儀式であると言ってよいであろう。それは主のみこころに対する服従の、公けの行いであり（マタイ二八・一九、二〇）、信ずる者がキリストと共に死んだという事実を描いている。これは救に益するところがあるのではなく、すでに救を受けた者たちのためのものなのである。

Dどのようにして、バプテスマを施すべきか―滴礼か浸礼か―という問題について、果てしのない論議が繰返されてきている。以下の事実は、その解答を見出だすのに有益である。

1「バプテスマ」という言葉は、ギリシヤ語の「浸す、もぐる、洗う」という意味の言葉からきている。

2キリストのバプテスマに関しては、こう記してある。「イエスはバプテスマを受けて、すぐに水

から上がられた」（マタイ三・一六）。

ヨハネ自身。サレムに近いアイノンでバプテスマを授けていたが、「そこには水が多かったから

3である」（ヨハネ三・二三）。

エチオピアの宦官のバプテスマについて、聖書は注意深く次のように記している。「ピリポも宦

4官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。水から上がって来たとき、主の

霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼らを見なかったが、喜びながら帰って行っ

た」（使徒八・三八、三九）

5上述のように（ローマ六・三）、バプテスマは葬りの写生であり描写である。滴礼は葬りの絵を意

味するものがないのに反して、浸礼はもっとも的確にそれをあらわしているのである。

Eしかしながら、バプテスマのやり方よりもさらに大切なのは、バプテスマを受ける人の心の状態で

ある。水の中にはいって浸礼を受けた人であっても、真にバプテスマを受けているとは言えない人

が、何千何万といるのである。真にバプテスマを受けた人とは、外面的な儀式を通してこれを受け

たばかりでなく、その生き方自体をもって、肉また古き人が、死にわたされていることを示してい

る人である。バプテスマは、外部に対する告白であると同時に、心の問題でもなければならない。

このことは、ローマ人への手紙二の二五―二九の「割礼」ということばの代りに「バプテスマ

（洗礼）」ということばを当てはめて、言いかえてみると、むしろはっきりするかも知れない。

もし、あなたが福音に従う者なら、なるほど、バプテスマは役に立とう。しかし、もし福音の歩みを拒むなら、あなたのバプテスマは無洗礼となってしまう。だから、無洗礼の者が福音に従うなら、その無洗礼は洗礼と見なされるではないか。かつ、無洗礼の者であって福音に従う者は、福音の文字とバプテスマをもちながら福音の歩みを拒むあなたがたを、さばくのである。というのは、外見上のキリスト者がキリスト者ではなく、また、外見上の肉における洗礼が洗礼でもない。かえって、隠れたキリスト者がキリスト者であり、また、文字によらず霊によるバプテスマこそバプテスマであって、そのほまれは人からではなく、神から来るのである。1

註1　ウイリアム・R・ニュウエルは、その著「ローマ書註解」の中で、教会の会員についても、これと同様の読みかえができるといっている。

Fバプテスマをほどこすためには、ひとりの任命された聖職者がいなければならないという思想は、聖書的ではない。キリスト者ならだれでも、他の人にバプテスマをさずけてよいはずである。

G教会の初期には、信徒がバプテスマを受けると、多くの場合、ほどなく迫害を受けるか殺されるかであった。しかもなお、他の人々もまた、教を受けると、いつもためらうことなく、バプテスマを受け、殉教者の列に加わるために、その歩みをふみ出すのであった。

今日においてさえ、ある地域では、バプテスマはしばしばきびしい迫害の始まりを告げるしるし

である。多くの国々においては、信者がキリストを口で告白している間は大目に見られている。しかしながらその人がひとたびバプテスマでキリストを公けに告白し、過去のきずなを断ち切ると、十字架の敵は戦いをいどんでくるのである。

それでもなお、払う代価がいか程であろうとも、バプテスマを受けた人はみな、ひとりびとりがエチオピヤの宦官と同じ経験を、喜びをもって味わうのである。聖書にはこう記してある、「宦官はよろこびながら旅をつづけた」。

第一二章　教会の儀式―つづき

2 聖餐―主の晩餐―

A この厳粛な記念の行事は、主イエスが裏切る者の手によってわたされるその夜に、主ご自身によって定められたものである。最後の過越の祭を弟子たちと祝われた直後に、主は私たちが聖餐と呼んでいることを、はじめて行われたのである。「それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行いなさい。』食事の後、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。』」（ルカ二二・十九、二〇）

B この儀式が意味するところについて考えると、少なくとも四つの主要な事実が提示されている―

1 それは一つの記念の場である。救い主は「わたしを覚えてこれを行いなさい」と言われた。主の受難と死、そのからだを与え、血を流されたことへの、記念の時なのである。ここに、この儀式にあずかる者たちの心の中に、ありありと、神から与えられた聖なる結びつきの一

切を秘めたゴルゴタが、浮び出るのである。

2 かくて、礼拝とさんびとをもって神に応答することなく、主イエスの受難を記念することは、不可能である。このように、聖餐は、公けの礼拝の時であり、神がこのようなかたであること、また、このようにされたことのすべてに対して、神をあがめる時なのである。

3 さらにまた、聖餐は、キリストのからだは一体であることの、公けのあかしである。さく前の一つのパンは、すべての真のキリスト者から成るキリストのからだを、象徴する絵である。このパンにあずかることによって、信者は、自分が神の真の子らのすべてと共にあるということを、立証する。またその杯を飲むことによって、自分が主の尊い血できよめられた人すべてと共にある者だということを認めるのである（第一コリント一〇・一六、一七）。

4 最後に、聖餐は、ご自身のこの記念を、自ら定められたかたが、再びこられるということを、絶えず思い起こさせるものである。

「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」（第一コリント一一・二六）

このように、礼拝をささげるものは、ゴルゴタをふりかえって主の死を想い起すだけでもなく、また、神の御座を見上げて、なし遂げられたあがないのゆえに、神をさんびするだけでもな

い。主が天よりくだってこられて、待ち望んでいる人々を家に連れて行ってくださるその瞬間へと目を注いで、じっと前方を見つめるのである。

C聖餐を守る時と回数については、聖書は規定を文字の上で命じてはいない。しかし、恵みのささやきのうちに、強く訴えているのである。

1使徒の働き二〇の七はこう述べている。「週の初めに日に、私たちはパンを裂くために集まった」。週の初めの日は、主の日であり、日曜日である。この日は、主の復活の日であり、主の民が礼拝と記念のために集まるのにふさわしい日である。

2聖餐の回数については、こう教えられている。「ですから、あなたがたは、パンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」（第一コリント一一・二六）人が、毎週とか、毎月とか、各季に一度とかに守らなければならないと言うとき、その人は聖書の告げているところを、越えているのである。しかし、同時にまた言えることは、初期の弟子たちが、主を記念するために毎週集った可能性が非常に高いということである。

チャールス・ハッドン・スポルジョンは聖餐を毎週守ることをこのように強く主張している。

私のあかしは、同時にまた現在の神の民の、多数の心をも言い表わしていると思うのであるが、それは、私たちの中のある人々がしているように、毎週、主のテーブルに集まることによって、パンをさくことの意味の

深さが失われることは、ないということである。—それは私たちにとって、つねに新鮮なのである。主の日の夕べに、私はしばしば思うのであるが、主題がどのようなことがらであるにせよ、—シナイ山上から万雷の叫び声が私たちの頭上におおいかぶさって来た時も、また、ゴルゴタのかぼそい声が私たちの心をさしつらぬいた時にも、パンをさくために来るということこそ、つねに、ふさわしいことと思われるのである。キリスト教会が、月に一度しか聖餐を守らず、共どもに集まって主がこられる日までキリストの死を記念するという、この日の栄光を奪い去って、週の初めの日を傷つけることは恥ずべきことである。聖餐を主日ごとに、記念することのうるわしさを、ひとたび味わった者は、その回数を少くすることに満足しないことは確かである。[1]

ジョナサン・エドワーズも聖餐を毎週記念することを主張した人であった。

初期のキリスト者が、主日ごとにその愛しまつるあがない主の受難の記念を守るならわしであったことは、聖書から見て明らかだと思われるし、また遠からず、キリスト教会においてもそうなるものと私は信じている。[2]

註1. 「旧約聖書の宝庫」より。

註2. 「リヴァイヴァル考」より。

D聖餐がキリスト者だけのものであることは、今さら言うまでもないことであろう。あがなわれた者

たちだけがその資格をもつのであり、また、その神から与えられた意味を自分とはいっていく力をもつのである。キリスト者は自分自身で自分を吟味した上で、この記念のしるしにあずかるべきである（第一コリント一一・二八）。罪は告白して、ゆるしを受けなければならないし、記念のしるしは、それに値する作法で食されなければならない（第一コリント一一・二一、二二）。自分を吟味することなく聖餐にあずかるものは、すべて、主からこらしめを受ける危険にさらされている（第一コリント一一・二七、二九―三二）。

Eここでもう一度、真に主を記念することなくパンを食し、ぶどう酒を飲む可能性があることを、自分自身に思い起こせておくことは、よいことである。象徴的におこなっていることがらに対し、私たちの心が感応しないとしたら、この聖なる儀式を単なる外形的儀式に変えてしまう可能性をはらんでいる。もし真に、「わたしを記念しなさい」との主の御言葉に従うなら、私たちの生活は、神との交わりのうちになければならないはずなのである。

第一三章　祈祷会

1 地域集会の集まりについては、新約聖書のうちに多くの指示が与えられているわけではない。キリスト者が、交わりと、祈と、ことばへの奉仕と、パンをさくこととのために集まったこと（使徒二・四二）は、私たちの知るところであるが、それ以上のことはヴェールにおおわれているようにみえる。福音のあかしに関する限りは、およそ求信者に手がさしのべられる所ならどこでも、個々のキリスト者の手によって、集会の領域の外で遂行されてきたようである。しかしそこには、救を受けた人を地域教会の交わりへと伴って来るという考えが、常に働いているのである。

2 初期の集会のあらゆる集まりの中で、祈の集まりほどずばぬけていたもののなかったことは確かである。事実、教会は祈の集まりの目覚めのうちに生れ出たのであり（使徒一・一四）、それ以来、キリスト者はひたすら祈のうちにかたく立ちつづけた（使徒二・四二）。まことに、教会史全体が、祈にこたえて下さる神の誠実さを示す文献なのである。

3 集まりの祈は、単に神からよしとされるばかりでなく、主ご自身の臨在という特別の御約束をともな

うのである。マタイ一八の一九、二〇には、こう記してある。

「まことに、あなたがたにもう一度告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

これほどはっきりした言葉は、今、またとないであろう。私たちは、破れることのあり得ない二重の約束を得ているのである。第一に、ふたりのキリスト者が、神に祈をささげることにおいて、一つとなるとき、その願いは答えられる。第二に、キリスト者が主イエスの名によって集まる時、主はそのただ中にいますのである。

問題は、私たちがそのことを信じていないところにある。もし信じるなら私たちの祈の集いは満たされ、私たちの教会は神のために火と燃えたつはずである。

4 集まりの祈という主題を考えるに当って、はじめに、それに関係のある基本的な事実を、いくつか提示したいと思う。

A まず第一に、祈祷会においては、ひとりの人がある時間の間、祈をみちびく。ほかの人たちは黙っているけれども、実際は全員が祈っているのである。聞こえるように声を出して祈っている人がそ

のグループの祈を表わしている。他の人たちは、この人の祈るのについていって、それを自分たちの祈とするのである。非常に多くの場合、会衆一同は、「アーメン」と言うことによって、この霊の一体性を表白する。

B次に言いたいことは「祈を言うこと」と「祈ること」との間には、大きい差異があることである。この区別をはっきりと歌った子供の讃美歌がある。

よくおいのりを　言うけれど
いのったことが　あるかしら
言ったことばを　はなれずに
あるくこころが　あるかしら

いしでつくった　かみさまに
いのりささげて　いるように
いきたまことの　かみさまに
くちでいのって　ないかしら

こころから出ぬ　おいのりは
主がお聞きには　なりません
くちさきだけの　おいのりは
主がお聞きには　なりません[1]

心の奥底から真にわき上ってくるもののない、予行演習ずみの祈の連続ほど、祈の集いを速かに殺してしまうものはない。あまりにもしばしば、私たちは、空虚な祈願の一覧表を口にするだけであって、その祈は天井からうつろにはねかえってくるのである。普通、回心して間もない人の祈は、自然に内から湧きでるものがあり、生き生きとしているので、人の心に生気を吹きこむ力がある。しかし古いキリスト者はしばしば　神にも人にも無用な、型にはまった祈に堕ちてしまうのである。

義務の気持からだけ祈をささげるような集会は、やめるより外はない。[2]

註1.　J・バートン作詩「いのったことがあるかしら」より。

註2.　E・G・フィスク「サボテン」より。

C避けるべき、もう一つの危険は、長い祈である。聖書が「絶えず祈り…」と言っていることは本当

であるが、これはひとりの人が祈祷会の時間を独占することを正当と認めているわけではない。もしそれぞれの祈りが短く、しかも多くの人が祈りに加わるなら、祈りへの熱意が増し加わるのである。

Dさて、私たちの願いはまた、はっきりと一つのことに向けられていなければならない。「神さま、全世界いたるところで多くの魂を救ってください」と祈るのではない。たとえば、「主よ、私の弟の、次郎を救ってください」と祈る方が、はるかによいのである。そして、次郎が救われた時、あなたは自分の祈が答えられたことを知り、外の人々のためにその名を指して祈ることに、力を得るのである。

5 祈祷会がつまらない仕事だというような理由は何一つ存在しない。恵み　の御座へとたずさえて行くことのできる、はっきりとした目的をもつ願いが、数多くあるのである。ここに、そのいくつかを挙げてみよう—

A私たちの上に立つ人々のために、その名を言って祈ること。この人々が救われて、「私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごす」（第一テモテ二・二）ことのできるよう、祈るのである。

Bあなたの教会の中の、病む人々のために祈ること。主はだれが病気かを知っておられるが、キリス

ト者の中には知らない人もいるであろう。それゆえ、その名をあげて祈るのである。

C救を受けていない親類や友人のために祈ること。祈禱会の席上で自分の愛する者の名をあげることは、決して恥ずかしいことではないのである。もし私たちが、真にこの人々の救を願っているなら、教会の祈の援助を歓迎するであろう。

D教会の長老のために祈ること。この人々は知恵と忍耐とが要求される重要な責任をもっている。そして、あなたの熱き祈に値するのである。

Eあなたの集会から派遣されている宣教師のために祈ること。もし、あなたが絶えず連絡をかわしているなら、この人々がどんな問題に直面し、何が必要であるかが分るはずである。

F日曜学校のため、その校長先生のため、先生方のため、神のみことばを教わっている少年少女のために、祈ること。

G貧しい人のために祈ること。もし、そうしてもらう側の人がだれであっても、困惑させてしまうような場合には、その名をふせておいた方がよいのではなかろうか。

Hあなたの集会から、遠く離れた地におもむいている人たちのために祈ること。この人々は、危険と、誘惑と、試錬に直面しているのである。

I伝道者や教師のように、主の仕事に従っている人々のために祈ること。

Jそして、あなたの祈には、必らず感謝がこめられていること。このことは、ピリピ人への手紙四の六において、私たちの前に力強くさし示されている—

何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。

主は、主の民が感謝にあふれていることを、当然、期待しておられる。主の恵みのすべてに感謝をいだかないのは、罪に外ならない。

6しかし、もし私たちの祈が答えられるとすれば、守られねばならない条件があるのではなかろうか。—まさに、そうである！

A第一に、私たちはキリストにつながっていなければならない。主はこう言われた、「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」（ヨハネ一五・七）。キリストにつながっているとは、主のいましめを守り、主のみこころを行い、御言葉に従うことである。

B第二に、私たちの祈りは主のみこころにそうものでなければならない。

「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ

神に対する私たちの確信です。」（第一ヨハネ後・一四）

神の御旨の大体の輪郭は、聖書を読めば分かるのである以上、私たちの願いは、聖書的でなければならない。それゆえ、聖書の言葉で祈ることである。

C第三に、私たちの願いはキリストの御名によってささげられなければならない。

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」（ヨハネ一四・一三）「あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」（ヨハネ一六・二三）

私たちが真に主の御名によって願い求めるとき、それは主が神に対してその願いをしておられるのと、同じなのである。

D最後に、私たちの動機は純粋でなければならない。ヤコブは、「願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです」（ヤコブ四・三）と、私たちの注意を喚起している。もし、私たちの動機が利己的で罪深いものであるなら、応答を期待することはできないのである。

7さて、この章を閉じる前に、もし私たちの祈祷会が、「教会の強力な推進力」であることを心掛けて

いるのであれば、ここで言っておかなければならないことがある。すなわち、もう幾つかの、なすべきことと、してはならないことである。

Aたとえば、見られるために祈ってはならない。ご存じのように、偽善者は、人に見せようとして、大通りのつじに立って祈ることを好んだのである（マタイ六・五）。

Bまた、自分でできるようなことは、神に、して下さいと願わないこと。私たちは、神に、まだ救われていない人々を私たちの伝道集会へ導きいれて下さるようにと願い求める。神は私たちが、この人々を招くために自分の口を用いること、また招きいれるために心を労することを、期待しておられないはずがあろうか。

Cそれから、あなたが、自分はそれをもっていてはならないということを知っているものを、願い求めぬように注意すること。神は時にかかる願いをかなえられたが、その魂を、やせ衰えさせられた（文語聖書、詩一〇六・一五参照）。

Dもし、祈への答がすぐに来なくても、気落ちしないこと。神の応答は、私たちが神を待ち望むことの幸を知らずに過ごすことのないように、早く来すぎることが決してないのであり、また、空しく神に依り頼んで来たとの不安をいだくことのないように、おそく来すぎることも決してないのである。

Eそれから、もし神の答が、ちょうどあなたの願ったとおりのものでないとしたら、想い起さねばならないことがある！　それは、主が、私たちの求めるものよりも更によいものを与える権利を、留保しておられるということである。私たちは、自分たちには何が最上であるか知らないが、主は知っておられるのであり、私たちがかつて願いも考えも及ばなかったものを、更に豊かに与えて下さるのである。

今、終りに当って一言強く言っておかねばならないことがある。それは、祈がなくては、教会における真実の進歩はあり得ないということである。私たちは、定まった日課を果していくことができるし、目に見える結果さえ産み出すことができる。けれども、執り成しの祈をさておいては、神のために何一つなしとげることはできないのである。もし、聖書からこの結論を見てとろうとしないなら、ぬきさしならない必要性から、私たちはまもなくそうならざるを得ないような立場に、追い込まれるであろう。

第一四章　監督たち

教会を霊的に見守り監督するために、神が備えてくださっている人々のことを、すこしも考慮することなく、教会の問題が解決されるようなことはないであろう。この仕事が、監督とか長老とか呼ばれている人々によってなしとげられるものであることを、明らかにして行こう。

1 初めに、いくつかの点をはっきりさせておきたいと思う。

Aまず第一に、監督という言葉についての新約聖書の概念と、今日、この言葉が用いられている肩書きとの間の、区別を立てておかなければならない。使徒時代の教会にあっては、監督とは、地域教会の霊的な繁栄のために労している、その教会の何人かの錬達したキリスト者のひとりにすぎないのである。今日の教会組織においては、監督とは、多くの教会をその権限の下におく教区の長として任命されている、高い地位の人である。

新約聖書の監督という言葉は、今日一般に考えられているような高位の聖職者の意味では決してない。この

言葉は、この箇所（第一テモテ三章）においても、また新約聖書の、他のどの箇所においても、「多数の長老をもつ国内の一定の地区を管区として、聖職者である自分の権限の下におく人」という意味はないのである。[1]

註1. アルバート・バーンズ「新約聖書に関するノート」より。

B新約聖書では、監督は、神と人との間をとりもつ人々の階級ではないのである。パウロがピリピの教会に宛てて書いた手紙の宛名は、監督を第一にせず、第二にしているのであって、これはおそらく、将来に頭をもたげてくるであろう主張に対する、戒めとも言えよう。そこにはこう記してある－

キリスト・イエスにあるすべての聖徒たちならびに監督たちと執事たちへ。

C新約聖書には、形式至上主義の思想は見当らない。堂々たる肩書をもち、そびえ立つような高い職につく代わりに、神の民の中にあって謙虚な奉仕に精を出すようにと指示されているのである。

「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」と聖書は告げている。[2] 監督は仕事であって、高職の地位を意味するのではないのである。

註2. ウィリアム・ケリーによる第一テモテ三・一の翻訳。「テモテへの手紙註解」より。

D終りに、知っておきたいことを一言つけ加えよう。それは、監督（bishop）とか、長老（elder,

presbyter）とか、監督者（overseer）とかいう言葉がみな、新約聖書では同じ人のことをさしているということである。このことは、次のような聖句を互に対比していくと明らかになってくる。

1使徒の働き二〇の一七における教会の「長老たち」（elders）という言葉にその引照が見出だされる。英語改訳聖書の欄外の註は、この“elders”という言葉が、“presbyters”という語と同一であることを指摘している。[1]

訳者註1. 日本語の聖書では、文語訳も新改訳も、同じ長老という言葉に訳されている。

2また使徒の働き二〇の二八においてはこの同じ長老たちが監督者（overseers）と呼ばれている。この同じ“overseers”（監督者）という語が改訳聖書では“bishops”（監督）と訳されている。

3テトスへの手紙一の五で、パウロはテトスに長老たちを任命することを命じているが、その直後（七節）、「監督」の資格を例挙しはじめているのであって、そこに再び「長老」が「監督」と同じであることを示している。

2さてここで、長老がどのようにして選ばれ、任命されるかという問題を考えてみることとしよう。

A結局、聖霊だけが人を長老とすることができるのであろ（使徒二〇・二八）。教会は長老を任命する

ために厳粛な会議を召集するかも知れない。しかし、その投票がひとりの人のうちに監督のこころを入れるのではない。

B聖書的な順序は、神が人を監督者とされてのちに、その人々が自分のなすべきわざをやり遂げていくときにはじめて、その教会がこの人々を神から任命された監督であると認めるに至るものであるように思われる。

Cもし、パウロや他の人々が監督を任命したこと（使徒一四・二三、テトス一・五）が論議の的となるなら、このことはただ、新約聖書が教会において、文字に書かれた形で役立つようになるよりも以前のことであったのだと、言いたいと思う。長老の資格に関する指示が、まだ文字に記されていなかった間は、教会は、これらの使徒たちや使徒の代理者たちに、頼らざるを得なかったのである。

パウロが教会を初めて訪問した時に、長老を任命したことが一度もなかったということもまた、心にとめておくべきことである。むしろパウロは、神が任命しておられる長老たちが、そのわざによって、自分自身をあらわすようになるまでの間、待っていたのである。そしてのちに、教会の承認を得るために、この人たちを選抜したのであった。

3いま聖書は、真の監督、あるいは長老の資格について、疑いをさしはさむ余地を全く残していない。

この資格は、テモテへの第一の手紙三の一―七、およびテトスへの手紙一の六―九に示されているのであって、次のように要約できると思う。

Aまず第一に、監督は、非難のない人でなければならない。評判がよく、非難を受ける余地のない人である。聖書は、罪のない人でなければならぬと言っているのではなく、非難のない人と言っているのである。もし公けの非難が真実であることが立証されれば、この人は監督のつとめを引受けることをさしひかえるべきである。

B第二に、監督は、ひとりの妻の夫でなければならない。これは、監督が結婚している人でなければならないという意味であると、解している人もある。他の人たちは、この聖句のうちに、多くの妻をもつ人が長老になることを禁じている意味をくみ取るのである。私たちは、後者が真実であることは、はっきり言えるのであるが、前者に関しては、独断的な決定は下しかねるのである。

C次に、自らを制する人でなければならない。改訳聖書の訳はこの点をはっきりと示している。監督は度を過ごしてはならないのである。

人によっては、穏健な中道を行くことがどうにもむずかしく思われるものである。この人たちはすぐ極端に走ってしまう。教会にはこういう人もいるであろうが、監督には不向きである。

D長老は酒を好まない者、あるいはまた、慎み深い心の持主でなければならない。長老は、キリスト

者の生涯が、ふざけて遊び半分にすごすべきものではなく、うわついたいい加減な生き方であってはならないことを、その生活をもって実証しなければならない。長老は永遠の問題と取り組んでいるのである。

E長老は礼儀正しくなければならない。あるいは「秩序正しい」と訳す方がなおよいであろう。不注意で怪々しいやり方は秩序の家において奉仕する者にふさわしくないのである。

F次に、「旅人をもてなし」と記されている。長老の家庭は、主の民のために開かれているべきである。ちょうど、ベタニヤにおけるラザロとマリヤとマルタの家のように。—イエスは、この家庭で過ごされることを好まれたのである。

G監督はよく教える者でなくてはならない。きわ立ってめぐまれた、豊かな賜物をもつ教師ではないかも知れないが、なおかつ問題が起こったときには、問題に悩む神の民を助けていくことができるように、聖書に十分に通じていなければならないのである。

H監督は酒を好んだり、また他の訳の表現を用いるなら、酒に心を奪われたりしてはならない。また、監督は人と争う人であってはならない。この二つは近い関係にある。自分の欲望を抑えることのできない人は、教会において信頼される立場に立つ価値がないことは確かである。

I監督は乱暴な人であってはならない。字義通りの意味では、他の人に対して暴力を振るってはなら

ない。たとえば従僕を打つというようなことは、長老の身分と両立しないのである。

J監督は金に淡白であって、汚れた金もうけに食指を動かしたりしてはならない。真の監督は、金は主のために、また主の利益に役立つためにこそ用いられるものであると、理解しているのである。欲の深い、意地のきたないキリスト者は、これと相容れない人物である。

K監督は忍耐強くなければならない。主は寛容であられた。そして、もとよりその僕は、自分の主より立派なものではないはずだからである。柔和と寛容は世俗の世界では力をもたないかも知れない。けれども、神の国では今も力ある存在なのである。

L監督は人と争ったり、口論を好んだりしてはならない。ある人は、帽子一つ落ちても、それをきっかけに一戦を交え、ささいな出来事に大論争を展開しようと身構えている。監督はそういう人ではないのである。

Mそしてまた、監督は利をむさぼってはならない。むさぼるとは、神がその人に所有させようとしていないものを、欲しがることである。むさぼることは偶像崇拝に外ならない。なぜなら、その人の意志を、神のみこころより上に置くからである。

N長老は謹厳な態度で子供たちを従わせ、その家をよく治めなければならない。—そしてその子供たちは信じており、素行が悪かったり無軌道だったりして非難を受けるようなことのない子供たちな

のである。この要求の必要性はきわめて明白である。

「自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。」

（第一テモテ三・五）

O長老は信者になって間もないものであってはならない。このことは「長老」という呼び名のうちに暗示されている。霊的な熟達が必要なのである。ある人は、年齢の点では年を取っているが、キリスト者としての体験が欠けているために、まだ霊的な監督者には適任ではないかもしれない。新しく信者になったばかりの人は、高い地位にもち上げられると高慢になり、悪魔と同じ審判を受ける身へと落ちていく危険性をはらんでいる。

P長老は教会外の人々にもよく思われている人でなければならない。世の人々が、長老こそキリスト者らしい人であり、誠実な人であることを知るようになるべきである。

Q長老はわがままでなく、軽々しく怒らず、善を愛するものでなければならない。正しく聖いものでなくてはならない。最後に、監督は信頼すべき言葉を固く守る人でなければならない。すなわち信仰の守護者でなくてはならないのである。

長老の資格を要約するなら、自らを制することができなければならないこと、自分の家がよく治め

られなければならないこと、そしてまた、神の真理のための戦士でなければならないことであると言えよう。

さて、ここで注意すべきことは、聖書は、監督が任命を受けた聖職者でなければならぬとは言っていない、ということである。聖書はまた、監督は学位をもたねばならぬとも言っていない。成功した実業家でなくてはならないとも言っていない。共に集う人々の中で目立つ存在であるかどうかは重要ではないのである。聖書は、個人としての外見のよさとか、銀行預金がどれほどあるかなどということは、何一つ言っていない。

長老は、あるいは不格好であったり、あるいはみすぼらしかったり、あるいは社会的地位のない人であったりすることもあるであろう。しかしなお、神の教会の長老なのである。このことを、私たちは真剣に考えてみようではないか。疑いもなく、今日の教会を虫ばんでいる最大の害悪は、霊的な資格をもっていない人を長老として認めていることである。その人が事業に成功した人だというので、霊的なものはあるかないかというほどでありながら、白羽の矢を立てられ、長老にまつりあげられてしまうのである。その結果、金で買えるものはすべて豊富になり、霊的な力を欠くことになる。

4 長老たちの義務は何々であろうか。

Aまず、第一に神に属する群れを牧する（霊的な食物を与える）ことである（第一ペテロ五・二、使徒二〇・二八）。神のみことばに奉仕することによってこれを行うのである。それは、公けの場での奉仕を不可欠の要件としているわけではない。家庭から家庭へと訪問して、そのつとめを果すこともあり得るのである。

B第二に、監督の仕事をすることである。「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい」（第一ペテロ五・二）とペテロは書いている。これはどういう意味であろうか。この聖句に続く箇所を読めば、この聖句の意味していないことと、意味していることとが明らかになる。

1それは、しいられた奉仕を意味してはいない。自ら進んでする奉仕でなければならないのである。

2金銭的な利益のために働くのではない。恥ずべき利得のためでなく、本心からするのである。

3神のものである、ゆだねられた者たちの上に権力をふるう意味ではない。長老は独裁者でもなく、親方でもなく、親分でもないのである。

4そうではなくて、それは、群れに対する模範を意味している。長老は、かの神の牧者が、ご自身の羊たちを追い回されたのではなく、お導きになられたのであることを、忘れてはならない。牧する者たちは、みな、同じようにすべきである。人間的な立場からは、指令が中央の本部から流

れ出て、従順に従えばよいようにするために、人間的権威を教会の中央に集中しておくことの方が、はるかに安易なのである。しかし、これは、神の方法ではない。長老は群れへの模範となることによって、教会を牧していくのである。

C非常に現実に即した方法で、長老は、教会における調和を高めていくのである。長老が神を信ずる心のあつい人たちであり、生涯、主を第一としてきている人たちであり、主イエスの恵みが自然とあふれ出ている人たちであるときは、そこに健全な、霊的な教会が見られるものと期待してよい。その反面、長老たちがこの世の問題に没頭しており、うわべの興味に心を奪われて、みことばを読み、祈る時間がないほど忙しいようなところには、その群れの中に冷やかな、死んだような空気がただよっているものと思って間違いないのである。

Dまた、長老は弱い人たちを助けるようにと命じられている。

「このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」（使徒二〇・三五）

この文脈から言って、監督たちは、援助を必要としている貧しい人々を助ける用意がなければならない。このことは、興味深いことである。群れから離れて暮らしていくのではなく、群れと共

に、その生活の道を分け合うのである。

E最後に、長老は、責め、戒め、勧めなければならない（第二テモテ四・二、テトス一・一三、二・一五）。信仰にもとることは何事であれ、全き権威をもって戒めなければならない。健全な教にとどまっていようとしない人々は、はげしく責めて、勧めなければならない。長老は信仰を熱き心をもって主張しなければならないのである。

5 教会は長老にむかってどんな態度をとるべきであろうか。何人かの長老が、教会から経済的な面での配慮を受けることは、テモテへの第一の手紙五の一七、一八を見れば明らかである。

「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。聖書に『穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない。』また、『働き手が報酬を受けることは当然である。』と言われているからです。」

他の人たちが自分の生活のために汗を流したこともまた等しく明らかである。パウロ自身が、このことの顕著な実例である（第一コリント四・一二）。

また更に、長老はとがめを受けてはならないし、父親に対するような扱いを受けるべきである（第一テモテ五・一）。1　キリスト者は、長老に対する訴訟を、ふたりか三人の証人がない場合は受理し

てはならない（第一テモテ五・一九）。

訳者註1　ここの「長老」という言葉は、英語欽定訳聖書の訳語は長老であるが、新改訳では「年寄り」となっている。

そして、監督は、人々がいつも心にとめつつ思い起こしており、認めており、かつ、心から従うようでなければならない。

「その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。」（第一テサロニケ五・一三）

「神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」（ヘブル一三・七、八）

6 最後に、監督の受ける報酬のことを書きとめておこう。

「そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠を受けるのです。」（第一ペテロ五・四）

第一五章　執事たち

監督のことを学んだ時に、監督の果す役割は神の家を霊的に養い、監督していくことであることを学んだ。監督たちは長老とも呼ばれ、教会を一手におさめるような監督ではなく、かえって、一教会に数人の監督がいるのだということに、私たちは注目したのである。

次に来るものとして執事のことを学ぶのであるが、ではいったい、執事とは何者であり、どのような役目をもつものであろうか。

1「執事」ということばは、単にしもべという意味である。―すなわち、奉仕のわざを遂行する人との意味なのである。新約聖書では、しばしば、この言葉は非常に一般的な意味に用いられている。たとえば、公務上、人々を治める立場に任命されている市の役人その人が、神の執事[1]と呼ばれているのである（ローマ一三・四）。フィベはケンクレヤの教会の執事として語られている（ローマ一六・一）。キリストご自身も神の真実を明らかにするために、割礼のある者の執事。となられたのである（ローマ一五・八）。

訳者註1　日本語訳では、神の執事という表現は用いていない。文語は「神の役者（えきしゃ）」、新改訳は「神の僕（しもべ）」となっている。

訳者註2.　同じく、文語訳は「割礼の役者」、口語訳は「割礼のある者の僕」となっている。

使徒の働き六の一―七には支払の面の仕事を担当するため七人の人が選ばれたことが記されているが、今は執事という名称が、この七人にあてはめられるようになってしまっている。実際には「執事」という言葉は、右の聖句の中には書かれていないのであって、このような任務に限定されるわけにはいかないのである。この言葉は、特に異なる任名は受けていない、どのような形の奉仕にもあてはまるのである。

2 執事の厳密な任務は、どこにも明記されていないものの、それでもなお、資格はテモテへの第一の手紙三の八以下に非常にはっきりと示されている。すなわち―

「執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。執事は、ひとりの妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人で

なければなりません。というのは、執事の務めをりっぱに果たした人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について強い確信を持つことができるからです。」

Aまず第一の条件は、謹厳でなければならない。軽卒で不まじめな人は、奉仕をしている相手の人々から信頼を得ることはできそうもない。

Bそして、執事は二枚舌を使ってはならない。すなわち、終始一貫していなければならない。ひとりの人にはこう弁明し、他の人にはそう説明するといった具合であってはならない。正直で曲がったことを排除することが義務なのである。特に執事のつとめが会計をあずかる役目をも含むものであるとするなら、いささかも疑惑や不信をうける可能性のあることは避けるような方法をとるべきである。

C執事は大酒を飲んではならない。酒におぼれる人間にはだれも信用を置くことができないのである。経験は、不節制や暴飲が、厳正さと信頼性との敵であることを教えている。こういうものは、神のための一個の人間のあかしを滅ぼし、その人を神への奉仕の不適格者とするのである。

Dまた、金銭に対して貪欲であってはならない。（これらの条件の多くが監督の資格と一致している。）欲深いこころは、落し穴である。もし人の心が富の蓄積へと注がれるなら、その人はその熱にとりつかれてしまうために、一生の間、他のすべての行為をひたすらこれに役立てようとするよ

うになる危険性がある。神の国と神の義とは、もはやその人の生涯の第一の場を占めなくなり、神のための仕事は、まがいものであり、受けいれられないものとなってしまうのである。

E執事は、きよい良心をもって、信仰の奥義を保っていなければならない。これは大切なことである。真理を知るというだけでは、執事には不十分なのである。執事は神にそむくことのない良心をもって真理を実践しなければならない。ヒメナオとアレキサンデルは、共に神のみことばを知っていたが、罪―すなわち、悪しき教理を言いふらした（第二テモテ二・一七）。彼らは良心のささやきをおし殺して、信仰の破船に会ったのである（第一テモテ一・一九、二〇）。神のみこころに適わないことがらを進んで見分け、主に味方してそれに反対しようとする感受性の強い良心に代るものは、何一つないのである。

F次に、聖書にはこう記されている。「まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。」（「執事の職につかす」とは、ギリシャ語では、単に「つかえさせる」の意）。このことは、深く考えねばならない重大さをもつ神の原則である。「まず審査を受けさせられ」るのである。他の聖句には「だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。」（第一テモテ五・二二）と書いてある。これは私たちすべてに欠くことのできない戒めである。私たちはだれでも、人に対する印象というものは、はじめて会った時に一番強く受けやすいものである。私たちはすぐに、そ

の人を責任ある位置につかせようとする。そしてしばらくたってから、事を急ぎすぎたということに気づく。「光るもの必ずしも金にあらず」である。私たちは、あまりにも、ちょっと見ただけで判断を下しすぎるのである。

Gその次の執事の資格は、英語の欽定訳聖書によれば、ややもすると執事の妻のことが問題にされているように見える。この訳は、「その妻たちも同様に謹厳で、他人をそしらず、自らを制し、すべてのことに忠実でなければならない」となっているのである。

しかし、私たちは、J・N・ダービーの訳（口語訳と同じ）の方が適切であると思う。すなわち、「女たちも、同様に謹厳で他人をそしらず、自らを制し、すべてのことに忠実でなければならない」。その要点は、この「女たち」とは執事の妻のことを言っているのではなく、むしろ、その女性自身が執事である場合をさしているということである。姉妹フィベは執事（しもべ）であった（ローマ一六・一）。

なぜ執事の妻だけが特別の資格を要求されていて、監督の妻にはそれがないのかは、理解に苦しむところであろう。

しかし、もしこの聖句の意味が、地域教会に奉仕する女性をさすものと理解すれば、何の困難もないわけである。

H長老の場合と同じように、執事もまたひとりの妻の夫であって、子供と自分の家とをよく治める者でなければならないことを、私たちは学ぶのである。もし人が、自分の家庭ですら尊敬と権威とを保持できないとするなら、教会で権威をもち、尊敬をあつめることは全く不可能に近いということは、すでに学んできたとおりである。

3さて、執事は二重の報酬を受ける。もし人が執事としてよくつかえたなら、良い地位を得る。この人は自分自身、聖徒たちの間でよい立場を得るのであり、キリストの審きの御座でのよき報いを則得できるのである。

第二に、この人はさらに、キリスト・イエスを信じる信仰による大いなる確信を、自ら得るのである。まことに、この世はこのような目標を、価値の乏しいものとしてながめている。それはあまりにも神秘的な、無形の価値なのである。しかし神の子にとっては、金よりも宝石よりもまさって価値あるものである。

執事の生活の維持については、監督の場合と同様のことがあてはまる。世間一般の仕事に従事している人たちもあるが、その人たちは、こうして自分の必要なものは自分でととのえるのである。方、自分を主の仕事のために全くささげている人々があり、このような人々すべてに対して、次のような原則が存している—

「福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得る」こと。（第一コリント九・一四）

「みことばを教えられる人は、教える人とすべての良いものを分け合いなさい。」（ガラテヤ六・六）

4さて、執事についての学びを終るに当って、ピリピ人への手紙一の一をもう一度引照したいと思う。ここには、教会に三つのタイプの人々が在ることが示唆されていることに気づくのである—すなわち、聖徒たちと、監督たちと、執事たちとである。呼び名が示されているのがこれら三つの階級だけであるということは、注目に価する。聖徒が第一、それから監督、それから執事である。聖職者と考えられている他の階級の名が、ここに挙げられていないことは注意すべきことである。それは、バーンズがその著「新約聖書註解」において指摘しているとおりである。

新約聖書には、聖職者の「三つの階級的秩序」があるのではない。使徒パウロはこの章（第一テモテ三章）において教会の責任ある場に立つべき人々の資格を、はっきりと書き示しているのであるが、「監督」と「執事」との二者にしか言及していないのである。前者はみことばの奉仕者であって、教会の霊的な面を受持つのである。後者は執事たちであって、この人たちについては説教するように任命されていたという明らかな証拠はない。—そして第三の階級はないのである。「監督」と「執事」との上に立つような人のことは全くふれられていない。使徒パウロは、教会の機構についてはっきりとした指示を与えているのであるから、もし彼が、教会において「高位の聖職者」の階級が必要であると考えていたとするなら、このような省略は理解できない

ことである。なぜこの人たちのことにふれられていないのであろうか。なぜその資格のことが一言も述べられていないのであろうか。もし、テモテ自身が上に立つ特別の聖職者であったとすれば、彼は他の人々に対して果すべき任務が何一つなかったというのであろうか。このような階級の人なら当然明記されてよいはずの特別な資格というものがなかったのであろうか。もしテモテ自身がこの地位についていたとすれば、パウロとしても、少くとも礼儀の上から言っても、この職務について何かふれていたはずではなかろうか。

その答は、もちろん、もし新約聖書の教会の機構が、監督と執事の階級をも含むものであるなら、パウロがそのことに言及しているはずだということである。この私たちの時代の巨大な聖職組織は、人間によってつけ足されたものであって、神のみことばに基づく正当な根拠は何一つないのである。

第一六章　教会財政

1 教会の財源

新約聖書を一貫して、教会はその財源を教会内の人々にまつものであることが、述べられてもおり、示唆されてもいる。教会の外部にある、まだ救われていない人々が教会を援助するために寄附をするということは、一言半句も暗示されてはいないのである。キリスト者がささげることは、礼拝の行為なのであり、かくて、キリストの貴い血によってあがなわれている人々に限定されているのである。同時に、また他の教会とか、教会の集団とか、中央機関とかから財源を支給されたり、補助金を受けたり、援助してもらったりする地域教会のことも、何一つ示唆されてはいない。すべての地域教会が、自給自立でなければならないのである。教会の財政というこの重大な問題に関係のある、新約聖書の主な教を列挙すれば、次のとおりである—

Aキリスト者の持ち物はすべて神のものである。

信者は管財人としての行いをするのであって、自分の主の栄光のために能う限りの方法を尽すのであ

る（ルカ一六・一―一二参照）。F・B・マイヤーはその真理を次のように述べている―

私たちは管財人であることが示されている。主のお金を、私腹をこやすために貯えるのではない。神がお置きになった生活の場において、私たちは、自分や愛するものたちの生計を支える分以上のお金のすべてを、主のために管理しているのである。そして私たちの、唯一のこの世的な目的はと言えば、主のお金がもっとも大きな利益を生み出すように投資すべきことであり、それは、主が私たちのところへ精算しにこられるとき、喜んで計算書を提出できるためなのである。[1]

Bキリスト者は主の仕事のためにささげることを命ぜられている。

1 いつささげるのであろうか。「あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に、……手もとにそれをたくわえておきなさい。」（第一コリント一六・二）

2 いくらささげるのであろうか。

a 神がそなえて下さる分に応じて（第一コリント一六・二）。[2]

b キリストが与えてくださる分に応じて。主は富んでおられたのに、私たちが富む者となるために貧しくなられた（第二コリント八・九）。主こそ模範であられる。

註1. F・B・マイヤー「エリヤとその力の秘密」より。

訳者註 2. 日本語聖書では「収入に応じて」と訳されている。

c貧たるはあり余る中からではなく、乏しい中からささげなければならない（マルコ一二・四四）。

d一言で言えば、キリスト者は惜しむことなくささげなければならない。ひとりのイスラエルびとのささげる最小限が、什一（十分の一）であった。彼は、什一**および犠牲のそなえもの**をささげたのである。恵みの下にあるキリスト者が、律法の下にあっては最小限の条件であった額をささげることで、満足していてはならない。

3どのような心でささげるのであろうか。

a自分自身をまず、主にささげるべきである（第二コリント八・五）。かくて、すべてが主のものであることを認めるのである。

bささげるのは愛によらなければならない（第一コリント一三・三）。そうでなければ無益である。

cそれは人目につかないようになされなければならない（マタイ六・一―四）。―たとえて言うなら、右の手のすることを左の手が知らないほどでなければならない。

dそれは、惜しむ心からではなく、喜んでするのでなくてはならない（第二コリント九・七）。

e初期のキリスト者たちは、各自の持ち物を売って互にその富を分け合ったことが聖書に記され

ている（使徒二・四四、四五、及び四・三二―三七）。これは、彼らの真の霊的な交わりが、外へ形となって表われた一つの姿であった。このような行為は、新約聖書にはどこにも命じられてはいないのである。事実、キリスト者がささげることに関連した聖書の命令を見ると、個人の財産の所有権が前提条件となっている。初代教会の行為は、自由な意志に基づくものであったのである。今日の修道院制度や共産主義と混同してはならない。

4ささげることの報酬は何であろうか。

a私たちが不正の富に（自分のお金の使い方に）忠実であれば、神は私たちの信頼に対して、真の富（霊的な財宝）を任せてくださるのである（ルカ一六・一一）

b霊的祝福は、収支を償わせて余りある（ピリピ四・一七）。この人は宝を天に積むのである。（マタイ六・一九―二一）なぜならその贈り物は「香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。」（ピリピ四・一八）からである。

C教会の会計をあずかる人々は、非難を受けることのないような方法で事務上の処理をしなければならない。

「それは主の御前ばかりでなく、人の前でも公明正大なことを示そうと考えているからです。」（第二コリント八・二一）献金をあずかる人は少なくとも二人は指名すべきである。使徒の働き六・一―

六を読むと、その集会のやもめへの資金の配分にたずさわるため、七人の人が選び出されたことを知るのである。使徒書簡は、金銭のことにたずさわる人が何人であるべきかをはっきり指示している箇所はないのであるが、この責任をひとりよりも多くの人の手にゆだねるのが通例となっていたことは第一コリント一六・三、四および第二コリント八・一八、一九から明らかである。はじめの聖句においては、パウロは、コリントびとが選んだ人々に手紙をつけ、贈り物を持たせて、エルサレムに送り出すこと、また、もし自分も行く方がよければ、一緒に行くことを述べている。この「人々」という複数形に注意していただきたいのである。後の方の聖句では、パウロは、教会からの贈り物を配分するため彼と同行するように、もうひとりの兄弟が選ばれたことを説明している。

2 教会資金の支出について。

新約聖書は、教会の資金を支出する上での、三つの原則的な目的を明らかにしている。すなわち、集会の中のやもめのため、貧しい聖徒のため、それから、みことばの宣教と教のために時間を献げた人々のためである。

A集会の中のやもめのため（使徒六・一―六）。

「ほんとうのやもめで、身寄りのない人」（第一テモテ五・三―一六）とみなされるためには次のよう

な条件に合致しなければならない。

1その女性が、ひとり暮しを余儀なくされていること。すなわち、援助してくれる親類縁者もなく、その生活の糧を全く主によりすがらなければならない人である（四、五、一六節）。

2少くとも六十才以上であること。

3この女性が次のような人であることが、よく知られていること。すなわち—

a種々の善行があること。

b子女をよく養育した母性であること。

c旅人をもてなしたこと。

d困っている人を助けたこと。（以上一〇節参照）。

B貧しい聖徒のため

神はそのみことばの中で、貧しい人々を憶えるようにと重ねて強く勧めておられる。（たとえば、ガラテヤ二・一〇、ローマ一二・一三）。また、旧約聖書における神の民の繁栄は、彼らの貧しい兄弟たちに対する扱いの態度に、密接に結び合わされているのである（申命一四・二九）。

紀元四十五年ごろ、ユダヤ在住の多くのキリスト者は、貧困にさいなまれていた。これはおそらく、きびしい迫害と広い地域を襲ったききんのためであろう。アンテオケの聖徒たちは、バルナバ

とサウロの手で、このユダヤの兄弟たちに援助を送ったのである（使徒一一・二七―三〇）。コリントにある集会は、これと同じようにすることを促がされている（第一コリント一六・一―三、第二コリント八及び九章）。私たちも同じように貧しい人々に手をさしのべる責任をもっている。主イエスは、「貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。」（マルコ一四・七）と言われた。信心深いこころで実際に世話をして上げることができるような貧しい人たちを、メンバーに持っていることは、集会にとってよいことである。バーンズは、キリスト者を一つに結び合わせて分裂としっとと争いとを防ぐ偉大な道は、全員が関心をもち、全員がささげられるような、一つの共通の募金目標をもつことであることを指摘している。

しかしながら、働くのがいやなばかりに貧乏暮しをしている人々に対しては、責任がない。このような場合については、神からのご命令はこうである。「働きたくない者は食べるな。」（第二テサロニケ三・一〇）

C主のためのの仕事にその時間をささげている人々のため。

1福音をのべ伝える人々、また、みことばを教える人々が、聖徒たちから援助を受ける資格がある

というのが、神の原則である。

「みことばについて教をうける人は、教えてくれる人に、この世の持ちものを惜しむことなく分けてあげな

さい」（ガラテヤ六・六、ウエイ氏訳による）。（また、第一コリント九・四―一四、第一テモテ五・一七、一八参照）。

2しかしながら、しばしば使徒パウロは、集会からの友情を受けるよりは、むしろ、手ずから働いたのである（使徒一八・三）。

その理由はこうであった―

aエペソ人への模範として奉仕するため。すなわち、彼らもまた、弱い人々を助けるようになり、かつ、与えることの幸を知るようになるためである（使徒二〇・三三―三五）。

bコリントで彼に批判的な態度をとる人たちが、彼のことを、金銭的な動機があるといって責めるのを、あらかじめ防ぐため（第二コリント一一・七―一二）。

cテサロニケの信者たちが、彼の援助を重荷と感じることを避けるため（第一テサロニケ二・九、第二テサロニケ三・七―九）。この聖徒たちは貧しく、また迫害を受けていたのである。

3ピリピの集会はパウロに仕えるよう命ぜられている（ピリピ四・一〇―一九）。注意すべきことは、パウロが交わりを望んだのは、自分が窮乏していたからではなく、彼らの「収支を償わせて余りある霊的祝福」（ピリピ四・一七）が得られることを望んでいたからだということである。

4また、使徒パウロは、自分の個人的な物乞のことは決して言いふらさなかったが、他の聖徒たち

の困窮を知らせることは、ためらわなかった（第二コリント八及び九）。このように、知らせることと、泣きつくことの間には、差異がある。チェイフ博士が指摘しているとおり、「知らせることが必要とされていることは、万人の認めるところであり、さもなければ、賢明なささげものをすることはできない。真の問題の中心は、そうではなくて、泣きつくところに存在する」のである。

3 結　論

新約聖書を読むものは、教会の資金運営が、なんと喜ばしくも単純であるかに気づくであろう。そこには重荷となるような律法主義的な規則もなく、また、骨折って築き上げられた複雑な財政組織もないのである。もし聖書のこの単純な教が守られていたとすれば、二つの重要な結果が得られるはずである。すなわち—

a 教会の必要とするものは、懇願しなくても、惜しむことなく満たされること。

b 教会は金をかき集める機関だなどという、世の非難を受けないで済むこと。

第一七章　女性の奉仕

1教会における女性の地位と奉仕について、新約聖書にははっきりとした指示が与えられている。これらの教を要約すれば大体次のようになる。すなわち—

A救とか、神のみまえにおいて受けいれられることとか、そういうことがらについては、女の人は男の人と平等である。「男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」（ガラテヤ三・二八）

Bしかしこのことは、教会においては異性間の相違が取り去られているという意味ではない。日常生活の諸問題を処理していく上では、聖書は男性と女性の間に区別を立てているのである。たとえば、エペソ五章には次のような警告が記されている—

「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。（二二節）　夫たちよ。…自分の妻を愛しなさい。（二五節）

Cそれゆえ、神のみまえにおける立場が問題とされている限りは、婦人は男子と全く同様に扱われる

のであるが、教会内における女性の位置が問題になっている限りは、区別が立てられていると言えよう。その区別とは、一言で言えば、女性は男性に服従すべきであるということである（第一コリント一一・三）。

2 女性の服従が立証されるようなさまざまの方法を、はっきり示すために、みことばには次のような命令が示されている—

A 女性は教会で黙っていなければならないこと（第一コリント一四・三四、三五）。「黙っている」とはどういう意味であるかが、さらに説明されている。

1 女性は教えることが許されていない（第一テモテ二・一二）。

2 公けの場で質問してはならない（第一コリント一四・三五）。

3 静かにしていて、万事につけ従順でなければならない（第一テモテ二・一一）。

B 女性が男性の上に立つことは許されない（第一テモテ二・一二）。

C かしらにおおいをかけないで、祈をしたり預言をしたりしてはならない（第一コリント一一・五）。

ところが、これは教会において女性が公けの祈をささげることを許さないという意味であることを、第二テモテ二・八は強く暗示しているのである。すなわち—

男は…どんな場所でも、きよい手をあげて祈ってほしい。

ここでは、"men"という言葉は人間という意味ではなく、「女性」に対する「男性」という意味である。ここで用いられるギリシャ語の言葉は、女を含まない意味である。

3 もしこれらの教が、きびしい律法主義的な気持から女性たちに強制されるなら、その結果は通常二重になってあらわれる。すなわち—

A 心からわき出ていない、しいられた服従を、神は喜ばれないこと（詩五一・一七）。

B その女性たちは、自分自身、にがい思いと腹立たしい気持をいだくようになりやすいこと。もし、その反面、このような教の理由がはっきりと理解され、愛をこめた、従順な心からの服従が伴うのであれば、その時、これは主の目から見て大きな価値をもつのである（第一サムエル一五・二二）

4 キリスト者の女性が、なぜ男性に服従すべきであるかを説明するために、神はいつくしみ深く、みことばのうちに一定の基本的原則を述べていて下さる。

A まず第一に、創造の順位において、男は女よりも先だったのである。

「アダムが初めに造られ、次にエバが造られた」（第一テモテ二・一三）

「男は女をもとにして造られたのではなく、女が男をもとにして造られた」（第一コリント一一・八）

ここで主張されていることは、創造の時に神によって定められた秩序こそ、とりもなおさず、神が教会においても維持したいと思っておられる秩序に外ならないということである。すなわち、女

のかしらは男である（第一コリント一一・三）。

B第二に、創造の目的が、男は女のかしらであることを示している。「男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。」（第一コリント一一・九）

C第三に、エバがアダムの権威を侵し、それを奪った時に、罪がこの世にはいったことである。「また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。」（第一テモテ二・一四）主は、このような型の不従順によって傷つけられるような、新しい創造を望んではおられないからこそ、女性に服従していることを教えておられるのである。

D第四にパウロは、女性が服従すべきことを示すために、旧約聖書を引き合いに出し、それとも一致することを述べている（第一コリント一四・三四）「妻たちは……律法も言うように、服従しなさい。」このことをはっきり述べた特別の戒めがあるわけではないものの、しかもなお、それは旧約聖書の趣旨である。

E女性が、祈ったり予言したりする時には、かぶりもの（または、顔おおい）をすべきであるとの教えについては、もう二つの理由が示されている。すなわち—

1天使が見守っているという事実。「ですから、女は頭に権威のしるしをかぶるべきです。それも御使いたちのためにです。」（第一コリント一一・一〇）

を天使の群れが見守っているさまを描いているように思われる。そして、女性は男の権威のしるし、徽章として、そのかしらにかぶりものをすべきことを、述べているのである。このように天の御使いは、はじめの創造においてエバが犯した誤りを、新しき創造において重ねて犯すことのないようにと、見守っているのである。

2 自然そのものが教える教訓。「自然自体が、あなたがたにこう教えていないでしょうか。」（第一コリント一一・一四）創造の時に、神は女にはっきりとした区別を示すかぶりもの―長い髪―を与えられた。パウロはこのことから、神の原則が例証されていると主張する―すなわち、女性が祈ったり預言したりする時にはヴェールか、かぶりものを頭にかぶるべきであるということである。

5 女性が男性に服従するという事実をみると、何か神の摂理では、女性は除外されて奉仕の場をもたないかのような感じをうける。しかしながら聖書は、女性の奉仕―公的なものではないにしても、やはりそれに劣らず真実で重要な奉仕―を示すことによって、この考えを否認している。

A 女は子を産むことによって救われる（第一テモテ二・一五）。この難解な聖句は、信心深い母親が、たとい公的な奉仕をすることは禁じられていても、だからと言って無用の存在へと追いやられるわけではないことを、意味しているのではなかろうか。女性の立場は、主をおそれつつ、また熱心にすすめつつ、その家族の面倒を見ていくことなのである。もし女性が、その夫と共に信仰の歩みを

つづけるなら、いつかは、みことばを宣べ伝えたり教えたりする息子たちを持つようになるであろう。かくて、「子を産むことによって救われます」という表現は、魂の救いを指しているのでもなく、また、子を産むという行為により肉体的な死から救われる意味ですらないのであって、むしろ、女性の立場と特権との救を言っているのであると思う。女性は無用の長物と化するのではなく、神の栄光のために生きる子供たちを養育するという、この光栄ある奉仕のわざをもっているのである。

B女性の奉仕の先例は他にも新約聖書に見出だされる。すなわち—

1持ち物をもって奉仕すること（ルカ八・三）。

2厚いもてなしをすること（ローマ一六・二）。

3若い女たちを教えること（テトス二・四、五）。

6女性の奉仕という主題に関連して、数え切れないほどの反論や疑問が起きてくるのであるが、そのうちでもっとも一般的なものをあげれば、次のようである—

Aこの主題に関するパウロの教は、女性に対して偏見をいだいている独身の男性の見解を、代表するものではなかろうか。

答。それどころか、これらは神の聖い御霊の教である。言いかえれば、パウロがコリント人への第

一の手紙一四の三七に記しているように、「主の命令」なのである。

B パウロは単に、当時の地方的習慣を教えているのであって、こういう状態が今日にも適用されるなどとは思っていなかったと言えるのではなかろうか。

答。パウロがコリント人へあてて書いた始めの手紙は、コリントにある神の教会へだけではなく、「主イエス・キリストの御名を至る所で呼び求めているすべての人々」（第一コリント一・二）にあてて書かれたものである。それゆえ、この教は万人共通のものである。

C パウロは、第一コリント一一・一六において、自分が教えてきていることからは拘束するものでもないし、また、このような習慣は神の教会の中で行われているものでもないことを、暗に示しているのではなかろうか。（「たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、私たちにはそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません。」）

答。このような解釈は、聖書の霊感と権威とを根底から危うくするものである。この聖句が真に言おうとしているのは、主のこういうご命令に対する反論は、諸教会の風習にないということである。諸教会は、議論することもなく、また、勝手に違う方へ解釈することもなく、これらの戒めを受けいれて従ってきたのである。

D 女性の髪は、かぶりものとして彼女に与えられたのである以上は、ただかぶりものとしての役目し

かないのではなかろうか。

答。コリント人への第一の手紙一一章には、かぶりものが二通り存在する。女性のかみは一五節にあるような意味でのかぶりものであると同時に、偶然的に五節のような見方をすべきおおいものでもある。さもなければ六節は事実上こう言っていることになる：

もし女が、頭に自分の髪をのせておかないなら、その髪を切ってしまうがよい。髪を切ったりそったりするのが、女にとって恥ずかしいことであるなら、髪を頭にかぶるべきである。

こんな意味にとることのできないことは、言うまでもない。これは、女の人の髪とは異なったおおいものが必要であることを、意味するものでなければならない。

E女性は教会で黙っているようにとの戒め（第一コリント一四・三四）は、礼拝中におしゃべりをしたり、陰口をきいたりすることを単に禁じているものではなかろうか。

答。聖句は「彼らは語ることが許されていない」と言っている。ここで「語る」と訳されている言葉は、新約聖書では決して「しゃべる」とか、無駄口をたたくとかいう意味をもってはいないのである。同じ言葉が二一節では神に関して用いられている。「わたしは、異なった舌により、異国の人のくちびるによってこの民に語る」と。

Fその他にも多くの疑問が起こってくる。たとえば、婦人が公けの場であかしをしたり、自分の伝道

の仕事の説明をしたり、独唱をしたりすることは、いいのであろうか等々。個々の場合は、聖書のうちに明確に取扱われてはいないのであって、それゆえ、みことばの普遍的原則にのっとって決定を下すことが、認められねばならないのである。

かくて、疑問の余地のある場合には、こう問うてみるべきである—

このことは、男の上に立つ権威を手中に収めるような要素をもっているであろうか。

女性が指導者の地位にとって代っているであろうか。

女性がみことばを教えていろであろうか。

これらのことがらが禁じられている以上は、みことばに関するこれらの教の精神に違反するような要素をもつおそれのある物ごとは、避けるべきである。

7 これらの戒めを定められた神の御目的は、神ご自身の栄光はもとより、神の民の幸をも、もくろまれるところにあったのである。神のみことばが無視され、ことさらに破られるところには、必然的に争いと無秩序が起こってくる。女性が権威を無理にその手に収めること、また公けに教えることがもたらす明らかな害悪は、様々の礼拝式　中でも目立つのは、セブンスデー・アドベンチスト派、見神論派、クリスチャン・サイエンス—に見られるのであり、これらの礼拝では、女性がきわだった役割を果しているのである。

それとは対照的に、キリスト者の女性が、神の命じておられる場にあって、「柔和で穏やかな霊という朽ちることのないもの」（第一ペテロ三・四）を身につけているのをみることほど、心楽しく、美しい感じにうたれるものはないのである。

第一八章　主のみもとへと進もう！

これまで私たちは、教会の全世界的な、普遍的な一面と、地域的、地方的な他の面とを共に学んできた。そして、新約聖書のうちに教えられているような教会の原理を、発見しようと努めてきたし、また使徒の時代に存在したような、集会の単純さと熱心さと霊性とを把握しようと追い求めてきたのである。

いま、ここに残る問題は、「二十世紀に生きる信者たちに、このすべてがどのように適用されるか」ということである。

まず、この問に答えるためには、現在、教会であると自称している教会のありのままの姿を、一通り見ておくべきである。私たちはあらゆる方面で、背反と、誤りと、破滅とを見出だすのである。私たちの目につくものは、物質的な富と政治的勢力には結びついていながら、霊的な力を欠いている巨大な聖職組織である。私たちは、教派主義、宗派主義が、その派に属する者には忠誠を要求し、経済的負担を義務づけながら、しかもなお、自分の側からは、不信仰な、ゆがんだ教会観を与えていることに気づくのである。私たちは、教会の諸集会が、生命のない儀式と、理の死んだ型通りの礼式とで占められていて、人々には

キリストの代りに影を与えているに過ぎないということを、見出だすのである。そしてまた聖職組織が一般の信徒たちを物言わぬ司祭か、さもなければ単なる機械に格下げしてしまっているということを知るのである。私たちは、救われた者も救われていないものも、ひっくるめて同じ会員としている教会、生ける救主との命の通う結びつきがない人と、真の信者とを、いっしょくたに会員としている教会に気づくのである。そして最後に、近代主義[1]のパンだね、すなわち、あがないの恵みを伝える福音の代りに、社会的な福音を置きかえてしまい、それによって毒されている教会を見出だすのである。

このような環境に、自分が置かれていることに気づいているキリスト者が、なすべきことは何かと問われるなら、答はただ一つしかあり得ない。それから離れることである！

その仲間から離れて、主のみもとへと進み行くことである！

神のみことばは、聖職制度であれ、教理であれ、道徳上の問題であれ、あらゆる形の悪からキリスト者が身をひくべきことを主張する点では、冷酷なまでに非妥協的である。

「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。[2] 正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるで

しょう。

神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。『わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。』」（第一コリント六・一四―一八）

訳者註1. 近代思想による教理の再検討を主張し、純粋の福音を伝えるかわりに、貧民への社会的救済というようなことに次第に重点を移して、結局は真実の福音は消され、そこには社会的、人間的なものしか残っていない。

訳者註2. 名目のみの信者と一緒に一つの教会を形づくって行くことができないということ。なお、二七ページ参照。

キリスト者は腐敗した教会の内部にあって、神のための声となるために、その教会内にとどまるべきであると主張するのは、空しいことである。「その名が霊感の書、―聖書の諸章に光輝を放っている偉人や聖徒で、内部にとどまりつつ、自分の時代を動かした人は、ひとりもいない。すべてが、例外なく、『さあ、グループを出て、進んでいこうではないか』と絶叫しているのである。…世の水準を引き上げようとして、世にはいっていく人は、間もなく自分自身が、かえってその水準にまで引き下げられていることに

気づくのである。…もっとも安全でもっとも強固な立場は、グループの外に立つことである。アルキメデスは、もし自分に、この世界の外部のただ一つの点さえ与えてくれたなら、私はこの世界を動かすことができる、と言った。これと同じように、ほんのわずかの神の僕であっても、もし、かのエリヤが権力者らの座の外に立ち、その時代の世から離れていたのにならいさえすれば、自分の生きる時代に影響を与えうるのである」。[1]

「自分で、悪いということを知っている教会の位置に、なお続けて留まることを主張するすべての人に、サムエルは適切で力強い解答を与えている。――『従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる』と。」[2]

註1. F・B・マイヤー「エリヤとその力の秘密」より。

註2. C・H・マッキントシ「創世記講義」より。訳者註。なお、引照聖句の中の『従うこと』とは、主の命令に従うことであり、『犠牲』とは、罪のゆるしのために、ユダヤ人がささげた「そなえもの」であって、当時すでに真の意味はうすれ、形式的なものとなっていた。

しかしなお疑問は残る。「『出て来なさい』との、聖書の指示に従ったのちに、人は何をなすべきなのであろうか」。

これに答えるため、聖書に基づく方法を、次に書きとめておこう。

A同じ志をいだく信者のグループと共に、キリスト者の単純さをもって、互に集まること。

Bキリストのみもとへのみ集まること。キリストだけが、私たちの心をひきつける中心となるようにすること。このようなやり方は、大群衆を動員するという結果は期待できないであろう。しかし少くとも、試錬や失意のためにたやすく動揺することのない忠実な信徒たちの核心を、形成していくのである。

C集会の場所に関する限り、一軒の家庭で全く申しぶんがないのであって、聖書には多くの先例がある（ローマ一六・五、第一コリント一六・一九、コロサイ四・一五、ピレモン二）。宗教的な雰囲気をかもし出す金具類をつけた、壮大な建築物が必要だと言うものは、主イエスが、主の民の集まるその中心の人格的な存在であることをもって全く満足しておられるということを、真実には全く悟っていないのである。

D真の信者を、その交わりから締め出すような名称や、方針を取りいれないこと。

E教派に加盟することなく、聖霊教会の主権を犯されるような、外部からの支配や干渉をいっさいかたく拒否すること。

Fひとりの人の手に奉仕を追いやってしまうのを許すような方向へ、たえず傾いていく傾向に抵抗す

ること。かえって、キリストが教会に与えておられる賜物を、聖霊が用いて下さるままにしているべきであり、すべての信者が祭司であることを、積極的にあらわすための備えをしていること。

G 祈と、みことばの学びと、パンをさくことと、交わりのために、お互が規則正しく集まること。そして、個人としてもグループとしても、活動的な福音宣教の努力に励むことである。

H 一言にして言えば、キリストのからだであることを忠実にあらわすことと、主のご命令に服従することによって、もっとも真実な意味において、新約聖書の教会にふさわしいものであろうとすることである。

興味深いことには、このことが現在、世界のいたるところで、多くのキリスト者の手によってなされているのである。この人々は、聖書以外のどのような書物をも手引の書とすることなく、これらの原則が神よりのものであることを見出だしたのであり、非難と中傷の渦中にあっても、なおそれに従ってきている。そして、キリスト以外のかしら、主のからだなる教会以外の交わり、御座以外の司令部をもたないのである。この人々は、真にへりくだった心をもって、キリストのみからだの一体性をあかししようとつとめている。現代主義や、閉塞のある雰によって、不当に圧迫されている真の信者のための聖所を、自分たちの交わりのうちに備えようとしているのである。これらの教会の名をのせている名簿は地上にはなく、互に教会と教会とを結び合わせる地上的な性質もない。これら諸教会の唯一の一体性は、聖霊によって形

づくられ、維持されているという点にある。しかも、そうあって当然であるということに、満足をおぼえているのである。

主の民の、犠牲的な、祈をこめた実践を通し、教会の偉大なみかしらの力によって、互に相似た交わりが何百となく、形づくられて行くことが、どうしていけないと言えるであろう。その理由は、存在しないのである。キリスト者たちが、はっきりとその姿を把握し、そのためには苦難をも喜んで受けているところには、主がその実践と努力に対して報いて下さり、主の栄光への渇望を、満ち足りるものとして下さるであろう。

キリストが再び帰ってこられる、まさにその前夜に当って、変節せるキリスト教界に対し、聖霊によって一つの大きな反撃の火の手があがり、新しい生気に満ちたみめぐみの活動が、聖書を愛するキリスト者の少さな独立の交わりを次々と形づくっていくのを、私たちがこの目で、目のあたり見ようとするのは、果して可能であろうか。

ねがわくは、教会を愛してそのためにご自身のいのちをささげられたかたが、ご自身の栄光のために、このことを実現して下さるであろうことを！

本書は、一般の手引きの書としても、また、通信講座の教材としても利用できるように、編集発行されたものです。御質問は、左記発行所にお問合わせ下されば、いつでも当所よりお答え申上げます。

キリストは
教会を
愛された

翻訳権
所有

Used by Permissiom of Author

一九六一年六月一五日一版
一九七六年　月　日二版
一九九六年三月　　三版

配布価　円
答案用紙　円

著者　ウイリアム・マクドナルド
訳者　山下秀雄
印刷者　安藤淳
発行所　エマオ聖書通信教授所
浦和市辻二―二五―一〇
FAX・TEL〇四八―八六一―一〇二二
郵便口座〇〇一五〇―三―一三四九一一